不完全近隣系図

キロキロなお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不完全近隣系図

【Ｎコード】
Ｎ４９９０Ｑ

【作者名】
キロキロなお

【あらすじ】
好きなのに今の関係を壊すのが怖かったり、成長するごとに欲望が増えたり……同じ町内のワケあり幼馴染ーズがそれぞれに考えたり、企てたり、悩んだり、暴走したりを各視点で連載してます。ラブコメ、ところによりシリアス模様の中学三年生日記。微量～中程度のＲ１５場面を含みます。

除夜―Ⅰ　願掛け

ずっと。

愛が、欲しかった。

生きていてもいいんだよっていう　愛　が。

それを、くれたのは……あなた、でした。

凍えるような闇の向こうで、ゴォーンという鐘の音が聞こえた。

志野原愛美〔しのはら　いつみ〕はハッとして、神社の境内の石段を急いで上ろうとするけれど、元々が体力のない彼女はすでに息切れを起こしていてしばらく休憩しなくてはならなかった。

確か、一緒に上っていたハズのクラスメートたちは今はもうどこにもいない。

中学三年の年末、というこの季節にそれぞれの志望校合格を願おうと企画された「年越し願掛けツアー」はほぼクラスの全員が参加をしている。

「ハァ、ハァ」

まだ、年は明けていないはずだと愛美は無理やり足を動かす。

「ひっ、ひゃぁ！」

足を踏み外して、体が傾く。

そこをガシリと支えて助けてくれたのは、よく知る顔だった。

「真ちゃん」

「危ねぇーよ、おまえ」

と、嫌そうに顔を顰めた幼馴染の彼に、「ごめんなさい」と謝る。

「あれ？　でも、どうしているの？」

クラスの違う春日真〔かすが　しん〕がこの企画を知っているワケはない。愛美も言わなかったのだから、彼が知る機会はなかったハズだ。
「あー、そこで見かけて……心配だったから後ろについてた。案の定、だったな」
深い息を真が吐くと、冷えた空気が白く濁った。
「志野は丈夫じゃないんだから」
「そうだよね。わかってるんだけど……真ちゃん、また彼女に振られちゃうよ？」
助かったけれど、申し訳ない気持ちになる。
愛美はけっして彼と彼女の邪魔をしたいワケではないのだ。もちろん、彼を好きなのは確かだし、そばにいたいから同じ高校に行きたいと願を掛けに来たのだが。
真には、誰よりも幸せになって欲しい。
それが、正直な気持ちだ。
「今日、約束してたじゃない？」
「あー、うん。でも、しょうがないよ……これで振られるんなら」
「そうかなあ？」
愛美からすれば、ないがしろにされた彼女が不憫でならない。愛美には過保護なくらいなのに、彼は付き合う彼女に対しては不思議なほど淡泊だった。
「そうなんだよ。俺からすれば、志野に怪我されるほうがたまんないよ。おまえには前科がありすぎる」
睨まれて、愛美は肩身が狭くなる。
そのどれもが愛美のせい、ばかりとは言えないのが彼の悩みの種なのだ。きっと。
だからこそ、防げることは防ぎたいと思うのだろう。
「真ちゃんは優しいね」
言うと、彼は「そうでもねぇよ」と唇をへの字に曲げた。
彼の姉である春日唯子〔かすが　ゆいこ〕は有名な美少女で、彼

も姉の天使の容姿ほどではないにしろ綺麗な顔立ちをしている。
今は幼さもある可愛い顔をしているけれど、数年後には凛々しくなるにちがいない。
「あのね、願掛けに来たの。真ちゃんと一緒の高校に行けますように、って」
「ふぅん、志野ならもっと上に行けるのにな」
「ううん、無理だよ」
首を振って否定する。
どうして？　と首を傾げる彼に笑って愛美は石段を上りはじめた。
一段一段慎重に、上っているうちに年が明けたのか太鼓の音が響いた。

「　あけましておめでとう。今年もよろしくね　」

明けてから最初に挨拶ができたのが彼で嬉しいと思う。
ささやかな喜び。でも、かけがいのない　幸せ　――。

だって、わたしは。

あなたがいないと、生きていけないの。

呼吸の仕方だって忘れてしまうくらい……トクベツ。

だから、ずっと。

あなたのそばで、生きさせて。

除夜ーM　禁句

あの母から「新しい家族よ」と紹介されたのは小学生の頃だった。

おっとりとした感じの「お父さん」はおぼろげにある記憶の父親と雰囲気は　同じ　だった。

このタイプが母の趣味らしいと、ペコリと頭を下げて子供心に（大丈夫かな……）と心配になる。

何しろ、離婚した前の実の父親は優しいけれど優しすぎる人だった。

仕事に没頭する母は、時々怪我をしては病院のお世話になる女刑事で……結局は優しすぎる父に「耐えられない」と言わしめた人物だ。

普通、逆じゃないかな？　と幼いながらに思った記憶があるけど、その離婚劇の後の母の落ちこんだ様子でやっぱりこの人も「女性」なのだと知った。

だから。

そんな母に優しい人ができるのは、嬉しい。

でも、また母が落ちこんでしまうのは悲しい。

そんな気持ちをこっそりと「お父さん」になる人に伝えたら、おぼろげにある父親に似た笑顔で「君のお母さんは私の理想の女性なんだ」と言い切った。

そして、不安に瞬く目の前で茶目っ気たっぷりに片目を閉じて見せる。

「頑丈で、死ななそうだろう？　菜摘さんは」

カラカラとおおらかに笑ったその人を見て……（ああ、これが新

しいお父さんか）と、少し安心した。

ごうん、と遠く外から聞こえた除夜の鐘にうつらうつらとしていた栗石美晴〔くりいし　みはる〕はハッとする。

イカンイカン、と頭を覚醒させようとして、手元にある参考書を眺めればそれが無理な相談だと本能からの答えが返ってくる。

仕方なく机から離れて、階下の台所に向かった。

鼻歌を歌いながら、コンロに火をつけ、インスタントのカップうどんの包装袋を開ける。

「美晴？」

そこにやってきたのは、兄の要〔かなめ〕だった。

「勉強、はかどってる？」

嫌なコトを訊く兄だ。

「放っとけよ、向こうに行け！」

「普通蹴るか？　コラ、暴れるなよ。沸騰してるぞ」

「るさいっ！　わかってるよ！！」

火を消して、鍋からお湯をカップの中にそそぐ。

そばにいる要に警戒して、美晴は気を張った。

油断をすると、すぐに自分の気持ちが表に出てしまう性分だからだ。

彼とは親の再婚で兄妹になって、もう4年になる。兄と言っても、ひと月違いの同級だから学校も学年も同じという実にややこしい話で……中学に入ってからのクラスメートには説明していないコトだったりする。

「似ていない双子」というのが周囲の一般的な常識だ。

おおらかで頭がよくて見目麗しい兄と、口が悪くて頭もよくない上に男の子みたいな妹。

父親似と母親似、で一応納得してもらっているけれど……そろそろ厳しくないか？　と思わなくもない。

ズルズルとインスタントのうどんをすすっていると、頭をポンと撫でられる。
「わからない所があったら訊いてこいよ、どうせ同じ所やってるんだから」
同じじゃねぇよ！　と心の中で罵りながら、口の中はうどんでいっぱいで呻く程度しか返せない。
どんだけ優等生なんだ！
にっこりするな、頭を撫でるな、そんな目でみるなよ！　妹だと思って甘やかすな！！
「なんだったら一緒の部屋でしても……」
「だぁぁ！　絶対するかってーの」
「え？　する？」
「ちがう！　反語だ、理解しろっ」
「残念。俺、美晴と勉強するの好きなのに」

「あたしは好きじゃねぇーっ」

ゼェゼェと息を荒げる美晴に、要は微笑んだ。父親譲りの優しい面差しで、見惚れるほどの綺麗な顔。
（ずるい）と美晴は顔を下げ、逃げたいと思った。
けれど、家族である限り一つ屋根の下で過ごさねばならないし（少なくともあと3年は）、負けず嫌いな性格上敵前逃亡は屈辱だった。
「俺は、好きだよ」
出しうる限りの悪態が脳内を駆け巡った。家族だから、と言い聞かせるのにどれくらいの時間と労力がかかるか？　なんて、きっと目の前の人のいい兄は知らない。
そう思うと、腹立たしくて衝動に駆られる。
言わない、と決めている気持ちを――。

伝えたらこの兄は、どういう反応をするのだろうか？
好きにならないはずがない、優しくて守ってくれて女の子扱いされたのなんて……本当に　初めて　だったから。
好きになって、当然なんだ。

除夜ーK　不覚

小学生の頃、父親が連れてきた新しい「お母さん」は豪快な人だった。

物心つく頃には父の勤める病院に入退院を繰り返していた実の母親は決して弱い人間ではなかったけれど、生命力に溢れたタイプではなかった。ただ、頑張る人だった。弱音ははかない……うまく隠していたのだろうけれど。

そんな母の儚いイメージが強いせいか、母親とはそういう人間なのだという先入観があった。

支えなければ倒れるような……しかし、紹介された新しい母親は父よりもずっと逞しい腕としっかりと地についた足を持っていた。

ところどころに傷跡があり、しかも生々しく新しい傷跡も多い。が、痛々しさの微塵も感じさせないのはどういうことか。

「よろしく！」

がっちりと握手するその握力も男並みに強くて、ちょっとびっくりする。

「あっ、ゴメンゴメン！　力加減が難しいんだよな～」

何せ職場に子どもなんていないし、いるの凶悪犯並みの厳つい男ばかりなの～ヤダヤダ……と、生温かい眼差しでこちらを見てくるから困った。

「眼福！　ふふふ、さすが礼さんの血だわね。素晴らしいわっ」

な、なにが？　とは会ったばかりの「お母さん」には訊けなかった。

その隣にいる彼女の連れ子は、ちょうど同じくらいの背丈で年も同じだと聞いていた。

短い髪にクリッとしたヤンチャそうな瞳、よく陽に焼けた肌は真っ黒で母親と同じように生傷が絶えなさそうな感じだった。

男の子みたい、が第一印象で第二印象も第三印象も大きく変わらずそのまんまだった。

「かなめ？」

「うん、みはるちゃん。よろしくね」

手を差し出すと、相手は「げぇぇ！」呻いて身悶えた。

（げぇぇ！　って女の子なのに……）

「ちゃん、なんてガラじゃねぇって！　みはる、でいいッ」

「そう？　じゃあ、みはる」

いー、とそれはそれは嫌そうに白い歯をむき出しにしたので、あえて異論は唱えなかった。だって、無駄な努力は好きじゃない。

「おうよ！」

へへ、と鼻の下を照れくさそうに擦って、握手した「彼女」はやっぱり男の子みたいに笑った。

男の子みたいな美晴。負けず嫌いな美晴。弱いものいじめは許さない美晴。どんなに怖くても逃げ出さない美晴。

誰にも弱音を吐かない美晴。

最初は、そんな「妹」にハマるなんて思ってなかったのに、気がついたら誰よりも大切にしたい「女の子〔存在〕」になってた美晴。

「す、好き……ッだっ！」

除夜の鐘が鳴る夜、聞こえた妹のその言葉に栗石要〔くりいしかなめ〕不覚にもドキリとした。

（えっ？）

と、そんなに聞きなれない言葉だったかと戸惑う。いや、ほかの女の子からは結構言われ慣れているのだが（自慢ではない、断じて！）美晴からは「嫌い」と言われることは多くても「好き」と面と向かって告げられるのはめずらしかった。

特に、中学に上がってからは皆無と言っても過言ではないだろう。
疎ましがられる年頃なのだと半ば諦めていたのだが……。
言葉が出てこないことに困惑する。
要の様子を睨むようにうかがっていた美晴は俯き、次に顔を上げた時には真っ赤になって「なっ、なんちゃって！」と慌てて打ち消した。
「ウソウソ、冗談だって……本気にするなよ～」
「う、嘘？　何が嘘なの？」
打ち消されたことに思いのほか焦って、要は訊いた。
しかし、美晴もまさか追及されるとは思わなかったのか、「なっ、なんでもいいだろ！」と怒ったように言い捨てて耳まで真っ赤になって顔を背けた。
「忘れろ！」
と、命令されてピュゥとあっという間に逃げられる。
「無理、かもしれない」
忘れろと言われても、胸のドキドキはおさまらない。

いま。

芽生えた気持ちは、家族愛か……それともっと別の何かか……あるいは、両方かもしれないと要はぼんやりと考えた。
だって、もともと家族愛は芽生えているし。
妹への気持ちが深まったのだとすれば、素直に納得もできる。
震える手を包んだ　あの時　から　すべては　始まっているんだから。

除夜―S　トラウマ

俺は怖くて仕方がない。

彼女がそばにいないと不安でたまらなくなる。

また勝手に傷ついてるんじゃないかって、思うから。

ほんと、心臓に悪いんだ。

（だから、コレ　絶対　恋愛じゃねぇーし！）

と、自らに言い訳をして春日真〔かすが　しん〕はその相変わらずガリガリで肉の薄い体を支えた。

「真ちゃん」

「危ねぇーよ、おまえ」

いつも「そう」であるように　まったく　危機感のない志野原愛美〔しのはら　いつみ〕に腹立たしいやら、ホッとするやらで真は面白くないと睨みつけた。

「ごめんなさい」

素直に謝りながら、そのくせ改善はみられないからタチが悪い。

そんな彼の心情を知ってか、知らずか彼女は不思議そうに首を傾けた。

「あれ？　でも、どうしているの？」

「あー、そこで見かけて……心配だったから後ろについてた。案の定、だったな」

愛美に対しては、考えるよりも先に体が行動するのはいつものことだった。

一緒にいた女の子の怒った顔が目に浮かぶけれど、どうしょうもないと息を吐く。
「志野は丈夫じゃないんだから」
「そうだよね。わかってるんだけど……真ちゃん、また彼女に振られちゃうよ？」
「今日、約束してたじゃない？」と言われるまでもなく、そうだろうなと笑うしかない。
（彼女、っていうか、アレは女友達なんだけど）
それにしても、真が女友達と約束していたことを愛美が普通に知っている事実に複雑な心境になる。情報源は十中八九、栗石兄妹の片割れ栗石要〔くりいし　かなめ〕だろうな、と苦々しく思い浮かべた。
特にやましい何かがあるわけではなかったが、できれば気づかれたくないと思うのは幼い頃からのアレコレが普通の幼馴染よりも深いせいかもしれない。
そう。
真と愛美は普通の幼馴染よりも、少し関わり合いが深い。
それは、愛美のプライベートな問題であり、その問題は彼女の身体的、精神的な成長に深刻な影響を及ぼす種のデリケートなものだ。
今でも、真はあの小学生の頃の自分の言動に後悔している。
幼かったとは、周りの大人（先生や、両親）が慰めてはくれたし、戻ってきた愛美もむしろ真に感謝して異常に懐いたくらいなのだ。
縋るものは、真しかいないのだと刷り込まれた雛鳥のように見上げた眼差しを今でも忘れられない。
それまでは。
ガリガリの野良猫みたいで、ずっと警戒心をむき出しにしていたのに……あの出来事が彼女を変えた。
「あー、うん。でも、しょうがないよ……これで振られるんなら」
当たり前だ、と胸が苦しくなる。
「そうかなあ？」

何も分かってないふうで愛美は絶対の信頼を真に向けてくる。
だから、心配をするのは当たり前なのだ。
「そうなんだよ。俺からすれば、志野に怪我されるほうがたまんないよ。おまえには前科がありすぎる」
あんな場面は二度とご免だ、と睨みつければ彼女は笑った。

「　真ちゃんは優しいね　」

「そうでもねぇよ」
即座に言い返して、憮然となる。
愛美は真のそんな表情をうっとりと眺めていたかと思うと、「あのね」と切り出した。
「――願掛けに来たの。真ちゃんと一緒の高校に行けますように、って」
「ふぅん、志野ならもっと上に行けるのにな」
ぼんやりしているくせに、彼女は思いのほか頭の回転がいい。真の進学する高校も平均より上だが、それでも学校の先生たちはガッカリするだろう。
「ううん、無理だよ」
やけにキッパリと愛美は言って、石段を上りはじめた。今度は慎重に上る彼女の後ろについていくと年が明けたらしく太鼓の音が響いた。
「あけましておめでとう。今年もよろしくね」
振り向いた愛美が幸せそうに言ったから、ホッとする。
「はいはい、よろしく。前を見ろ」
トントントン、と跳ねる足取りで最後の段を上りきると、彼女は両手を掲げて喜んだ。

心の片隅で、俺は。

ほんの少し。

もしかしたら、彼女と離れずにすむことに、いま。

安堵したんじゃないかって、考えた。

始業―Ⅰ　日常

中学三年の三学期の始業式。
少しほかの生徒よりも早く登校していると、後ろから声をかけられた。
「志野原〔しのはら〕さん」
「栗石〔くりいし〕くん」
振り返ると、そこには栗石兄妹の兄の方である要〔かなめ〕が歩いていて、愛美〔いつみ〕が立ち止まった分近づいて来てすぐに追いつく。
「寒いなあ」などと白い息を吐きつつ、彼は手を上げる。
「おはよ。あけましておめでとう」
「あ、うん。あけましておめでとう。今年もよろしくお願いします」
ペコリ、と深々と頭を下げると、要は困ったように笑って「いいから、いいから」と愛美の頭を上げさせた。
「相変わらず真面目だね。真面目すぎるよ、同じ学年なのにさ」
「そ、そうだけど……うーん。やっぱりね、クセだし、治らないかなあ？」
「まあ、慣れてるからいいけど。で、アイツとはどうだった？　大晦日、会っただろ？」
「うん。会ったけど何もないよ？」
愛美はいつも訝しく思いながら、首を傾げる。
栗石要とは、家が近く小学校が同じということもあり、春日真〔かすが　しん〕と同じく結構古い付き合いだ。けれど、古いと言ってもそんなに親しいワケでもなく、こんなふうに立ち話をする程度で……しかも、その話題のほとんどは彼が愛美と真の間の世話を焼くようなものばかりだった。
そして、ことごとく進展がないのを今みたいに残念そうな表情で

見るのだ。
なんか、居たたまれなくて仕方ない。
「えっと、だから、期待されてもね……ありえないっていうか。むしろ、栗石くんはどうしてそんなにわたしと真ちゃんに興味津々なのか分からないっていうか」
真が誰か（女の子限定）と出掛けるとか、約束してるとか、告白されたとか、結局振られたとかの情報を持ってくるのは、いつもこの同級生だ。
もちろん、気にならないワケではないから、ありがたいと言えばありがたいのだけど。
「そう？　君ら二人を見てるとまどろっこしいからねえ。情報を志野原さんに流すのは僕の優しさかな？　たぶん言っておいた方がショックが少ないだろうし、っていう……ね」
「うん。それは……ありがとう」
「いえいえ、僕の意地悪でもあるから。志野原さんが感極まって告白するきっかけになれば、とも思ってる」
にこり、とおだやかに微笑む彼に、愛美は真意をはかりかねた。
首を傾げて本気なのかと、おずおずと見上げるけれど、よくは考えられなかった。
もともと他人の気持ちをはかるのは苦手、というか怖いからしたくないと心が拒絶する。
「栗石くんは湊西〔みなとにし〕高校だったよね？　第一志望」
「ああ、そうだよ。志野原は浦川高校だった？　アイツがそこだから」
「うん」
愛美と要は成績面ではほぼ同じ程度の数字の持ち主で、学年でもトップクラスの成績優秀者だ。
そんなこともあり、意外と接点は多いので話題には事欠かない。
「僕は医者になるつもりだから」

「そっかぁ、お父さんお医者さんだものね」
「そうそう、それも理由の一つかな」
他愛のない話をしながら、並んで学校に向かう二人の姿は仲睦まじいと見えなくもなかった。

パン！　と左の頬に平手が飛んで、さらにパン！　ともう一発右の頬に小気味のいい音が鳴った。
いい音がする、ってことは案外痛くないってことだ。
と、冷静な頭で愛美は考える。
案外痛くない。けれど、全然痛みがないか……と問われれば、もちろんそうじゃないに決まってる。
両頬はジンジンとした熱を持って、冷やさないとバレるかもしれないと内心心配だった。
痛みには慣れている。自分の身に起こる痛みには……でも、他人に与える痛みには慣れていないからできるだけ穏便に済ませたいと目の前の彼女たちに向き直る。
（誤解なんだし……）
と、ちょっと憐れんでしまったのが悪かった。
ぐい、とセーラー服の胸倉を掴まれて、足が浮く。
「馬鹿にして！　あんたなんて　ちょっと　頭がいいだけで、色気なんてテンでないクセにっ」
「春日くんにくっついてるだけじゃ足らなくて栗石くんまで手を出すなんてッ」
「身の程を知りなさいよ、似合わないんだから！」
春日真も栗石要も校内ではかなりの女子人気を持っているらしく、こういう呼び出しは何も今が初めてではなかった。
ただ、春日真のファンならいざ知らず、栗石要の場合は誤解なの

でどう説得すればいいか分からない。
彼女たちが訴えることは、的を射ている。
確かに、愛美には色気なんてないし（肉付きが悪いから胸もお尻も触り心地は最低ランク）、真だけでも分不相応なのは言わずもがな（でも、離れたくないからそばにいる）、要に至っては誤解されるのもおこがましい。
あとで、謝っとくね……って気分だ。
「……うん、そうだね」
愛美が胸倉を掴まれた喋りにくい体勢で頷いた時、バコッという何かを蹴った派手な音が響いた。
呼び出されたのは使っていない旧校舎の教室で、予備の机などを保管している場所だった。
「チッ、失敗したー。くだんないトコに首突っ込んじゃったじゃんよー、ヤメテくれる？」
入ってきた人影は、イライラした口調で舌打ちすると、突然の乱入に固まっている彼女たちを見る。
「っひ！」
と、引き攣る顔には絶望が映った。
腕の力が抜けて、掴みあげられていた愛美の体は床に下ろされる。
「美晴ちゃん」
「だぁぁぁ！　ヤメロ！！　テメェにちゃん、呼ばわりされる言われはねぇ！」
ぱぁ、と顔を綻ばせた愛美とは反対に栗原美晴〔くりはら　みはる〕は嫌そうに身悶える。
「とにかく！　お前らも要に告げ口されたくなかったら、こんなヒヨコ女に関わるなよ。バカを見るっコレ決定事項だからな！！」
「えー？　それほどでもー」
「褒めてない！」
何故か照れる愛美に、心底イヤだと美晴は頭を振って息を盛大に吐いた。

始業ーM　嫌悪

栗石美晴〔くりいし　みはる〕が志野原愛美〔しのはら　いつみ〕に懐かれたのは、小学生の時だった。
引っ越してきてそう間のあかない学校からの帰り道で、たまたま助けたのがガリガリの彼女だった。雨の日の捨て猫みたいだと最初に思って、次の瞬間後悔したのを覚えてる。
なにが、気に入ったのかいまだに美晴には解からない。
ただ、分かるのは彼女は「猫」ではなく、――「雛鳥」だということ。

愛美に絡んでいた女の子たちがそそくさと立ち去って、美晴も早々に離れようと背中を向けたが彼女は放ってはくれなかった。
教室に戻る道筋も同じともなれば、一緒に歩いて帰るのも自然の流れのような気もする。
「ええい！　くっつくなっ、うっとうしい！！」
「やだー」
腕を組んでくる愛美に対して、バッと振り払うと美晴は歩く速度を速めた。
つい、イラッときて割って入ってしまったのが運のツキ、やっぱり放っておくんだったと　猛烈に　後悔する。
「やだじゃねぇ！　ベタベタするのは春日だけにしろよ、気色わりぃ」
「えー？　女の子同士だもん、いいでしょー。ほかの女の子たちだってしてるよぉ」
女友達同士で腕を組んでいる様子は確かによくある風景だ。
だが、しかし！

「あたしはアンタと友達になったつもりはねぇ！　つーか、そんな女オンナした友達付き合いがしたいんだったら近場で　フツー　の女の子に声かけろよ。簡単だろっ？」
美晴の性分からして普通の女の子同士の付き合いなど、たとえ親しくなっても出来るとは思えない。考えただけでもゾッとするんだから、絶対無理だ。
わかるだろ？　と睨む美晴に愛美は目を見開きブンブンと首を振る。
「美晴ちゃんがいいんだもん。ほかの子なんていらないよ」
プゥ、と膨れてガリガリの女の子は恨みがましい目でコチラを見上げた。
「勘弁してくれ……」
美晴だって、愛美に偉そうに言えるほど友達付き合いがうまい方ではない。むしろ、女の子同士の付き合いなら数段彼女の方が上手だろう。
頭の回転がはやく、言葉遣いも丁寧だから人と円滑なコミュニケーションが取れるはずだ。
逆に頭が悪くて、口の悪い美晴はすぐに人とぶつかってしまう。昔はそれがどうしてなのか分からなかったけれど、近頃は思慮の浅い自分のせいだと自覚している。

だって、人間の世界には面倒くさいタテマエとホンネがあって、みんな使い分けて暮らしてる。
美晴にはそんな器用な生き方は出来ないし、見て見ぬ振りも本能が阻んだ。
たとえ、それが「地雷」だってわかってても。

形として、出来のいい兄の要が常にとりなしてくれるから深刻な事態〔爆発〕に陥ったことはないけれど、彼の迷惑になっているのは確かだからできるだけ人と関わらないよう単独での行動を心掛け

ているのに……。
初めて見た親鳥を追うようについてくる彼女を見遣って、ため息がついて出る。
（まったく、何が気に入ったんだか……趣味わりぃ）
「美晴ちゃん、美晴ちゃん」
「だぁぁ！　だから、ちゃん付けはヤメロ！！」
背中がゾクゾクする！　と眉間に縦ジワが寄るのをニコニコと愛美は受け流した。
なかなかの大物だと、こんな時だけは感心する。
「うんうん、今日からまたみてあげるね？」
「はぁ？」
何を？　と無関心に首を傾げる。
「ベ・ン・キョ・ウ」
「ああ……」
美晴は薄汚れた廊下の天井を仰いで、暗くなる。結局冬休み中はほとんど進まなかった受験勉強。頭のよくない人間が一人で努力しても、解ける問題は限られるという事実を痛感した。
「わたしは、栗石くんに教えてもらうのが一番いいとは思うけど」
やっぱりお願いできなかったんだね、と憐れむように見られ美晴は舌打ちするしかなかった。
できるわけがない、と。
一番いい？
「……全然、よくねぇ」
頼めば、要は快く教えてくれるだろうがそこまで迷惑はかけられない。自分の頭の悪さは自分でもイヤになるくらいだ。
「甘えたくねぇんだよ、要には」
「もー、仕方ないなぁ。美晴ちゃんはっ」
「うっせー」
腹の立つ弾んだ愛美の言葉に声を荒げたが、怒りは持続しなかった。少し、落ち込んだからだと思う。

放課後の教室で、美晴は問題に頭を抱え傍らには心持ち険しい表情をした愛美が座っていた。
通常がのほほん娘なだけに、事態の深刻さは明らかだ。
「本当に、サボってないの？　怒らないから正直に言っていいんだよ？」
「サボってねぇよ」
心外だと、美晴は唇を尖らせる。冬休みの間、根が真面目な彼女は　彼女なり　に頑張ったつもりだ。
もちろん、一人で頑張ったものだから　かなり　効率は悪かったけれど。
ハァ、と愛美は困ったように息を吐いて、無情な結論を美晴に告げた。
「イチから叩き直しだねぇ、年末には出来てた問題が間違えてるなんてありえないんだけど」
「げぇぇ！　うそ。頑張ったのにっ」
「んー？　もしかして新しい知識を入れると美晴ちゃんの場合、古い知識が消えるようになってる……とか」
「なに、それ！　意味ないしっ。あたしをバカにしてんだろっ？」
してないしてない、と慌てて（もう遅い！）首を振る愛美を恨めしく睨み悲壮な面持ちで舌打ちする。
「あーあ。結局、頭の出来が違うんだよなぁ？　やっぱ」
と、すべてが空しくなった。
告白しても、勉強しても、なにも変わらないなんて……どんだけ情けないんだ？
せめて。
言わなきゃよかったんだ、とあの夜のことを考えると消えたい気

持ちになる。
——家に、帰りたくない。
そんなふうに考える自分に、ほとほと嫌気がさした。

始業ーK　衝動

栗石要〔くりいし　かなめ〕はこれでも動揺していた。
それは当然である。義理の妹に恋心らしき感情を抱いて平静でいられるなら、地球最後の日が来たって平然としているだろう自信がある。
彼女の反応は分かりやすい反面、言ってしまったことに対する後悔が滲み出ていて要を当惑させた。
本当に、あの言葉を額面通りに受け取っていいものかどうか。
日が経つにつれ、その疑問は大きくなり問い質すこと数回。
昨日はお風呂から出てきたトコロをバッタリ出くわして、「ヒッ！」と見るからに警戒した美晴に投げかけた。
風呂から上がったばかりの彼女の短い黒髪は濡れていて、滴が寝間着に落ちている。
（ちゃんと乾かさないとダメだよ……）とハラハラしながら、口にする。
「あ、美晴……この前のことだけど」
「なっ、なんのこと？　あ、あたしはなンも知らねぇ！」
真っ赤になって、ピュゥとまたあっという間に逃げられた。
しかも。
今回は「落し物」まであった。
下着だ。
「……」
黒のチェックで意外と可愛い柄の小さな布。
洗濯したものを自分の部屋に持ってあがる途中だったそれを拾って、とりあえず洗濯物の彼女のカゴに戻しておく。
両親が多忙なので、昔から家事は分担制だった。だから、今に始まったことではないのだが（美晴がガサツ……いや、そそっかしい

のでよくある）ドキドキした。
普通に、彼女の衣服だって洗濯しているし、これからもするだろう。
けれど、もし……美晴と両想いだったら？
普通でいられるだろうか？
自分の置かれた状況を把握し、していないだろう美晴に出来るだけ早く確認しようと心に決めた。
（もうちょっと、危機感を持ってもらわないと襲うよ？　……俺が）
と、要は結構切実に本気で思った。

学校で美晴の姿を探すけれど、逃げているのか教室にも廊下にも見当たらない。
「栗石さん？　……さあ」
美晴のクラスメートに訊いても、「ものすごいスピードで出て行った」という目撃情報があるだけで芳しい返事は返ってこなかった。
（おかしいなあ、結構目立つはずなんだけど……？）
と、要は首を傾げて、もしかしたらと旧校舎の方に足をのばした。
途中で春日真〔かすが　しん〕と会い、志野原愛美〔しのはら　いつみ〕がどうやら数人の女生徒に（また）呼び出されているらしく、見かけたらそれとなく助けてやってくれと頼まれた。
まあ、ついでだし旧校舎の方を請け負って彼と別れ、廊下の分岐点で数人の女生徒とすれ違う。
「　！　」
彼女たちは要の顔を見るとギクリとした表情になり、慌てて走り去ろうとする。
その中には要と同じクラスの子も含まれていて……少し気になっ

た。
「あっ、ちょっと待って」
呼び止めれば、互いに目配せをして要をうかがう。
（やっぱり）と明らかに、彼女たちは後ろめたい　何か　を知っているのだろうと察して、あえて訊いた。
「美晴、見なかったかな？」
「え？　あっ、はい。見ました」
コクコクと頷いて、しきりに詳しい説明をする。
核心から外された問いに安堵した女生徒たちの他愛のない様子に笑って要は「そう」と頷いた。
（志野原さんを呼び出したのはこの娘たちみたいだな……美晴の話も具体的だし、嘘ではなさそうだけど）
「ありがとう」
と、礼を言って背中を向け、どうしたものかなと考える。
とりあえず、春日真のために顔は覚えておいてやろうと決めて、足を速めた時。
ピタリと止まる。
「　わたしは、栗石くんに教えてもらうのが一番いいとは思うけど　」
「　……全然、よくねぇ　」
聞こえたよく知る二人の少女の話し声に要は「ほんの少し」不機嫌になった。
「甘えたくねぇんだよ、要には」
美晴の意地っ張りな口調に「生意気な子だよね」と静かにため息を吐いて、踵を返す。
妹の素直になれない性格は要だって、よく知っている。
伊達に何年も兄妹として暮らしてないし、彼女のそこが一番可愛

いトコロだとも思っている。
でも、時々ひどく憎らしくて……たまらなくサディスティックな気持ちになる。
結構前からあった　衝動　ではあるけれど、あえて今までは出さなかった。

それは。
兄として、美晴に頼られたかったから……なのにね。

（あんまり、気はすすまないけど）
頭に浮かんだ方法は、とても、短絡的な単純な手法だったけれど、きっと上手くいく。
無駄な努力は好きじゃない要は、そう確信していた。

始業ーS　安定

新学期早々、クラスメートの園部〔そのべ〕に恨み節を聞かされ、春日真〔かすが　しん〕は辟易としながらも謝った。
電話でも謝っているのだが、それでも彼女の怒りはおさまらないらしい。
全面的にこちらに非がある、とは理解しているので強気に出れないのが悩ましいところだ。
「だから、悪かったって……言ってるだろ？」
「む～、誠意がありませんー！　女の子を一人にするなんて、危ないでしょっ」
そう言って、ギュゥと真の首を締め上げる彼女の力に「危ない」などという儚げな印象は　まるで　ない。もちろん、夜中に女の子を一人にするのはいただけないが、あの夜は校区内にある大きな神社だったから交友関係の広い園部なら知り合いに容易に出会うことができただろう。
事実、彼女はたまたま合流した友人に、真の非道をこれでもかと吹聴したのだ。
「ハイハイ、そーですね。誠意がなくて、節操なくて、サイテーのオトコですよ。オレは」
今までにも、同じような噂はあった。すべて身から出た錆〔サビ〕だと真は甘んじて受け止めているし、それでいいとも思っている。
好意を向けてくれる彼女たちを弄ぶつもりはないが、結果傷つけているのは真の悪いクセのせいだ。
彼女たちよりも、志野原愛美〔しのはら　いつみ〕を選んでしまう。
最後の究極の二択、にもなりえない。強力なカード。
パチン、と平手を頬に受けて顔を顰める。

彼よりも叩いた彼女の方が痛々しかった。
「もー！　信じらんないっ。春日のバーカ」
「悪かったよ、ごめん」
何度目かの謝罪に、深く息をついた。
悪い、と思っているのは本当。だけど、こんな言葉を何度紡いだところで彼女の傷は癒せない。
分かっててもしかない。
「ごめん」
「いーよ、もう！　わかった。さよなら！！」
どうして置き去りにされたのか、問い質す園部に愛美のことを話す気にはならなかった。
彼女が傷つくよりも、愛美が責められる方が真にはつらい。
何度かそういう場面に遭遇しているだけに、慎重になる。
（園部は、そんな女の子じゃないとは思ってるけど……）
できるだけ、愛美の周りに危険因子は置きたくない。
ただでさえ、人付き合いに偏りのある彼女は敵が多いし、それをあえてただそうともしない。
一番の要因は、真のそばを「彼女でもないのに」ベタベタと離れないことなのだと知っているのに、冷たくあしらってもついてくるから気が気じゃなかった。
いっそ、真に彼女がいれば風当たりが弱まるかと思ったが、それもうまくいかない。と言うか、逆効果？　みたいだ。
どうしたもんかな、と教室に戻ると、いつもなら休み時間ごとに姿を現す愛美がいなかった。
「……ったく。あのバカ！」
いれば冷たくあしらう真だが、そばにいないと探してしまうのは長年の経験からくる悪い予感が過るから。
ゾッとする。

彼女には敵が多い。害をなす「人間」が多い。その存在に慣れている彼女は、他人に助けを求めずに耐えることが　当たり前　だと思っている。
それが、彼女の世界にとっての……日常。防御本能、と言ってもいい。

真が愛美と初めて会ったのは、小学三年の時だった。
同じクラスで席も近くて、家もごく近い距離にあったから登校や下校を一緒にするようにと　何故か　担任の先生から頼まれたのだ。
どうして？　と疑問に思ったけれど、その頃の彼女はなかなか学校に来なくて、遅刻の常習犯でもあったから先生はそれを気にしているのだろうと勝手に考えた。
一緒に下校をしている間、互いに交わす会話はほとんどなかった。
もともと彼女は大人しくて……だから、彼女の「声」を聞いたことがない、という事実にこの時の真は気づかなかった。
何も知らずに。
面倒くさいと、口にした。
「おまえ、もうちょっとハッキリ言ったら？」
「……」
「イヤなら先生に言えばよかったのに……ボクだって言ってくれたら送り迎えなんてしないよ？」
ふるふると力なく彼女は首を振って、俯いたまま唇を横に引く。
「あのさ」とその骨のような手首をとると、振り払われヒュゥと空気を震わせるような声を出す。
彼女から最初に発せられた声は、言葉ではなかった。
苦痛に歪んだような、初めて産声をあげる赤子のような表情で真を見て、ハッと身を竦める。
怯え、だとその時は気づかなかった。

その次の日から愛美は学校を長期間休んだから、真は気分が悪かった。
まるで、自分が苛めたみたいじゃないか……と彼女の住んでいるマンションまで行って呼び鈴を押す。
けれど、彼女の家は大抵人の気配がしなくて、たまに母親らしい人が出てきて「愛美？　ああ、寝てるから無理ね」と答えるだけで問い質すなんてことは無理だった。
直接、文句を言ってやりたいのにできない……その繰り返しに半ば意地になっていたのだろうと思う。
その日も呼び鈴を押して、人の気配がなくて、イライラして戸口を蹴った。
ふと、扉の向こうから聞こえた気がした。
空気を震わせるような、声が。
「？」
戸口に耳をあて、気配のしない向こう側に悪寒がした。
もう一度、空気を震わせる弱々しい呼吸が聞こえて……それが、彼女のモノだと真は確信した。
扉を壊す勢いの真に、周囲の大人は大騒ぎになった。最初、真の言い分は聞き流されていたけれど、思いのほかの激しい抵抗と耳を澄ませば確かに聞こえる扉の向こうの微かな呼吸音にようやく管理人が鍵を開けてくれた。
「しのはら！」
小さな体に駆け寄ると、衰弱した彼女は虚ろな目をゆっくりと閉じて眠った。
極度の栄養失調だった彼女は入院し、しばらくして戻ってきた。
愛美の両親は、いわゆる暴力的な虐待をしているわけではない。もちろん、叩かれることはあると言っていたけれど……一番の問題は「育児放棄」という名の「何もしない」虐待だ。

無視をされるのだと、彼女は言う。
食事を与えない、部屋から出さない、言葉を発することすら許されない。
「最近はそんなに酷くないよぅ、ちゃんと登校してるでしょ？」
それでも、中学になった今でも肉親の　ソレ　は続いているらしい。

「　真ちゃん　」

探し回った末に見つけた彼女は目をまんまるに見開いて、「どうしたの？」と首を傾げる。
その頬が、少し赤い。
「……」
（どうしたの？　じゃねーよっ！）
と、真は心の中で叫んだ。

冬の夜ーⅠ　闇（前書き）

直接的ではありませんが、微量のＲ１５表現を含みます。ご注意ください。

冬の夜―Ⅰ　闇

差し出した手を振り払われるのは、当たり前のことだった。

物心がついた頃には常にお腹が空いていて、両親の顔色をうかがうクセがついていた。

お腹が空いて、空きすぎて、でも欲しいと口にすることもできない。

綺麗なスーツに身を固めた母の服に手を伸ばす。

パシッとその手を鋭く叩かれて、まるで汚いものでも触れたかのような形相で叱られたのは……いつのことだったろうか？

忘れてしまった。

けれど、忘れていない空虚感。

ああ、ダメなんだと手放した。

すべてを――手を伸ばして欲しいと願うことを、わたしは望まない。

望んではいけない。

もう、二度と……。

そんな幼い自分の人生観が覆されたのは、小学三年のことだった。

彼に会って、愛美は初めて知ったのだ。

望むこと、自分から求めること、そして相手が求めに応じてくれる……ということを。

食べ物を口にできず、世間体を気にした親に閉じこめられた空間で、だんだんと弱っていく思考に毎日鳴る呼び鈴だけが響いていた。

そのうち、来なくなると思っていた迎えの音は飽きることなく繰

り返され、愛美の薄れいく意識をそのたびに覚醒させた。
手放してしまえば楽だと知っている。
なのに。
それでも、縋りたいと本能が叫ぶ。

タスケテ。

ココ　カラ　ワタシ　ヲ　……　ダシテヨ！

ドンドン、と扉が叩かれ、開かれる。
「しのはら！」
春日真〔かすが　しん〕が手を差し出して、頬に触れた。
愛美の体に応える力は残ってなかった。涙さえ枯れていた。
でも、その瞬間に愛美の心は決まっていた。
目を閉じる。

この人のために、わたしは何ができるかな？

何か……できる？

できるなら、なんでもするよ。

（真ちゃん……）
目を開けると、そこは暗い部屋だった。
息が苦しい。ずっと昔の夢を見ると、果たして自分はどちらの世界の住人なのかと身震いがする。
大丈夫、と体を抱きしめておまじないのように彼の名を口にする。
「真ちゃん……」

涙が零れた。あの頃には零れなかったものが頬を伝って、薄いシーツを濡らした。
学年が上がるにつれて、少しずつ想いの形は変わってくる。より鮮明に、原始的な関係を望んでくる心。
聞いた当初、幼かった愛美には大して意味をなさなかった言葉の羅列が次第に大きな重みをもってのしかかるのだろうと思わせた。
彼がいないと呼吸もできない。なのに、いつかは離れなくてはいけないのだろうか？

ううん、まさか。ありえない。
ずっと、友達のままなら　きっと　一緒にいられるよ。

言い聞かせるのに、心は頑なに首を振る。
（――イヤだよ。足りない。全然、足りない……！）
体のどこかが切なく濡れて、彼を愛したいと嘆く心が溢れた。指でその場所を探って、なだめる。

ねぇ、夜だけ。

ここだけでいいから。

あなたを想って、いいですか？

冬の夜－M　敗者

頭の出来の悪さに打ちひしがれて家に帰ると、玄関先で待っていたらしい要と目が合った。
母は刑事、父は大学病院の先生という多忙な両親のためか、家に親がいることは滅多にないので必然的に兄の要が美晴のお目付け役となっている。
同じ年なのに……と思わなくもないが、彼の年のわりに落ち着いた物腰と美晴の無鉄砲な性格をかんがみると受け入れるしかないとも思えた。
冬の夕暮れは早く、すでに日はとっぷりと暮れている。
「ただいま」
「おかえり」
靴を脱ごうと屈んだ頭上から、「遅かったね」と咎めるような声が響いた。
「？　あぁ？　いつもこれくらいじゃねぇ？」
年を越す前から志野原愛美に勉強を見てもらっていた時には、これくらいの時間まで学校にいたから今、どうしてそれを言うのか理解できなかった。
「気付いてたよ、ただ言わなかっただけ」
「ふーん、だから？」
よく分からないけれど、どうやら要の機嫌はかなり悪いらしい。いつもならどんなに怒っても穏やかな雰囲気が残るのに、今はまるで別人のようだった。
喧嘩腰で向かってこられれば、美晴の負けず嫌いな性格上請けてたってしまうのが成り行きだった。
「なんか、文句あんの？」
「まあ……ね。志野原さんに勉強みてもらってるの？」

「なっ！」
なんでバレてんだっ？　と凄めば、要は「俺がみてあげるって言ってるのに」とあからさまに嘆いた。
「いっ、いらねぇ！」
「意地っ張りなんだから、それとも俺に勉強をみられたら　何か不都合なことでもあるの？」
ありまくりだ！　と心中で動揺しつつ、何とか誤魔化す……努力をする。
「べ、べつにっねぇよっ」
「本当に？　じゃあ、俺でもいいでしょ？」
いやいやいや！　と全力で拒否をすれば、要は目を光らせた。
優しい兄の面影はどこにいった？　あるのは、面白がるような鬼畜の顔だ。
嫌がる美晴をここまで彼が執拗に追いこんだのは、初めてのことだった。しかも、その手段に　まったく　容赦がない。
「やっぱり、アレが原因？　俺が好きとか……」
「うわぁぁぁぁあ！」
美晴は叫んで、真っ赤になって兄の口を手で塞ごうと飛びかかった。

「おっ、おっ、おぶらーとにくるみやがれ！」

口をギュウギュウと塞ぐ美晴の両手首を要の手が掴んで、やんわりとそこから退ける。
その口元は笑っていて、「オブラート、って」と可笑しそうに息巻く妹を見た。
いや、見上げた？
「俺を押し倒しておいて、それもどうかと思うけど」
「へ？　お、おしたおし……ぅぎゃっ！」
よくよく見れば、確かに彼を下にして馬乗りになっていた。

「わっ、ワザとじゃねぇし！　……は、放せよっ」
退こうにも要に掴まれた手首が自由にならず、美晴はブンブンと腕を振り回して抗議した。
「俺に美晴の勉強をみさせてくれたらね」
「ヤダ」
「じゃあ、放さない」
「げぇぇ！　放せよ！！」
「イヤだね」
つーん、と言い放つ要はさらに美晴の急所を突いてきた。
「手、放すついでに――もう一つ、忘れてあげてもいいよ」
「はぁぁ？」
なに？　ちょっとやそっとじゃ頷かないぞと警戒する。
「美晴の言ったこと」
ニッと笑った要はどうする？　と寝転んだまま下から固まった彼女をうかがって身を起こす。
「わかったよ」
呻くように美晴は答え、項垂れた。
あの告白をことあるごとに蒸し返されては心臓に悪い。忘れてくれるんだったら、兄妹にも戻れるだろう。不出来な妹、ではあるけれど。
我ながら卑屈だな、と向かい合う相手に彼女は油断していた。
「そうこなくっちゃ！」
要は手首を放したと思ったら、次にその腕で妹を抱きしめるように包みこんだ。
セーラーの襟際、ベリーショートのうなじに生温かい吐息がかかって、ゾクリとする。
（ぎぃやぁぁぁぁあ！　近いちかい！！）
美晴は暴れ、兄を突き飛ばすとものすごい勢いで逃げ出した。

「いてぇ、普通足蹴にするかぁ？」
背中に聞こえた要の声はいつもと少しも変わらないように聞こえたから、回転の悪い頭がさらに混乱する。
（あ、足蹴？　し、してねぇしてねぇっしてねぇよっ……たぶん！）
５メートルほどの距離を取って振り返り、立ち上がる彼がまるで何事もなかったとばかりにこちらを見て口角を上げた。
「　！　」
その。
優美な微笑みが、今までと同じなのにどこか男っぽい気がして、美晴は頬が発火するほどに狼狽えた。

現実では、たとえ――天邪鬼な彼女が「　か、要のばぁーか　」と可愛くない憎まれ口を叩き、べェーだと舌を出していたとしても。

冬の夜ーK　勝者

夕食後のリビングで、栗石要〔くりいし　かなめ〕は笑いを堪えるのに必死だった。
いや、堪えてはいなかった。
（美晴……分かりやすすぎなんだけど！）
がるる、と威嚇の唸り声が聞こえそうな警戒をピンっと張って、時々要をうかがう目が眉間にシワを刻んでいる。
くっくっくっ、と要が肩を揺らして声を出すのを我慢しているものだから余計に機嫌が悪くなる。
「な、なんだよ！　なにがおかしいってんだっ、要！！」
「べ、べつに。くっ！　あーっはっはっはっふははっ！！　おかしいっ、美晴。そんな分かりやすく警戒しなくてもいいのに……何もしないから」
今はね、という心の声は意図的に呑みこんで兄らしい笑みを浮かべた。
「勉強みるって言ったんだから、勉強するよ。当然でしょ？」
ぐっ、と見透かされたことに対する羞恥か、真っ赤になって美晴は要を睨んだ。
「んなことわかってるよ！！　何も警戒なんかしてねぇしっ」
「へー、ホント？」
疑わしい、と半眼で素直すぎる相手を見れば、彼女は吠えた。
「当たり前だっ、警戒なんかしねぇ……覚悟しやがれ！」
警戒を解いてくれるのは当初の予定通りだ。本当は「忘れる」と言った取引を彼女に提案はしたくなかったけれど、そうでもしないと美晴はずっと引きずって要から逃げるだろう。
彼女は決して器用な人間ではない。身体能力は高いけれど、頭脳戦にはすこぶる弱い。

面前の問題として、まずは「受験」がある。
要との　恋愛　が彼女の　それ　に影響しては困るのだ。
「覚悟、って？」
「あ、あたしの頭の悪さを甘くみんなよっ！！」
「くっ！　ぷははっ、何ソレ？　面白いんだけどっ。俺を笑わせてどうすんの、美晴？」
「笑わせてねぇ！　勝手に要が笑ってんだろっ」
くそっくそっと口汚く罵って美晴は、笑う兄を無視して机にかじりつく。
「美晴、そこ早速違うよ？」
「うえ？！　うそ！！」

青くなって見直す彼女に、要は（甘くみてるのはどっちなんだろうね？）と苦笑いする。
何年、兄妹をしていると思ってるのか。
美晴の能力なら美晴よりも　ずっと　正確に把握している要からすれば、彼女の頭の悪さは個性の一つだ。クセがあって、教えるのに　少し　コツがいる。
天才肌の志野原愛美〔しのはら　いつみ〕では　それ　を見つけるのは至難の業だろう。
くすり、と笑って要は美晴の対面側に座って問題集を開いた。
「大丈夫。どんなに美晴の　出来　が悪くても、俺　知って　るから幻滅しないよ？」
キッと対座する彼女は要を睨み、「関係ねぇ……」と唸る。
美晴は野生の動物に似ている。本能的な負けず嫌いだ……倒したい対象がいれば闘争本能が刺激されて集中力が格段に上がる。
優しいだけの兄では、限界があるけれど。
「まぁ、せいぜい頑張りなよ。今のうちにね」
「くそったれ！」

挑発的な言葉は、彼女の闘争心を煽るための　道具　。
別の意味も言質にこめてはいるけれど、今は気づかれないほうが都合がいいかな？

美晴のためにも。
そして。
自分のためにも、ね。

（さぁ、覚悟をするのは美晴のほうだよ？）
要は、親の仇でも討つように問題を解く彼女を映して……その目をサディスティックに細めた。

冬の夜ーS　光

「ただいま〜」

玄関を開けて、帰ってきたのは春日唯子〔かすが　ゆいこ〕。春日真〔かすが　しん〕の姉だ。

栗色のふわふわとした長い髪とくるりとした愛らしい瞳、柔らかな白い肌は血色もよく小さめの唇はほんのりとした桜色をしている。

その目立つ容姿は、ご近所や少し離れた校区まで「春日さん家〔ち〕のユイコちゃん」と言えば、「常春の天使」と呼ばれる程度に有名なのだ。

そして、最近は。

――ご機嫌な様子で帰ってきた姉に真は気が気じゃない。

天使と評される姉、唯子は見た目の通りに少々天然ボケが入っている。

つまりは状況把握がすこぶる鈍い。

普通なら、このリビングで憮然としている父親に気づくものだが……彼女には父親は目に入っても、その絶対零度の空気は感じないらしい。

まあ、姉が常春な思考を持っているのは今に始まったことではないけれど。

「遅い！　どこに寄り道してたんだ！？」

と、最近とみに機嫌の悪い父親が言った。

「純也さんのとこ。言ってたでしょ、お父さん、遅いってまだ九時だよ？」

幼い頃、その愛らしさから頻繁に物騒な人に目をつけられ攫われかけた経験がある父親はこの清らかな姉に対してかなり過保護になっている。

いざという時のために護身術を習わせたり、特に男性とは極力接触をさせないように目まぐるしい努力をしていた。
けれど、そんな姉も１７歳。高校二年のお年頃だ。
去年、高校に入学してそこで　初めての　恋をしたらしく……現在は、目下美大生の先輩とプチ遠距離恋愛中。
父親とはそんな彼氏とのお付き合いで頻繁に意見が食い違っている。
父親は、可愛い愛娘が心配で早く帰ってこいと言い、恋愛中の姉は出来るだけ離れている先輩と会いたいと逢瀬を重ねる。
「早くない！　唯子、お前はまだ高校生なんだぞ！！」
「それが？　どうかしたの？」
眉根を寄せて、首を傾げる。
よく分からないと父親を問う。いや、静かにその言い分を責めている。
「付き合うなんて、まだ早いっ」
男なんてケダモノなんだぞ、と父親が怒鳴るや、彼女はみるみる機嫌を損ねた。
「先輩はケダモノじゃないもん」
ぷぅ、と頬を膨らませて睨む。
姉は彼氏のこととなると、反抗的になる。特に彼の悪口と取られるものには徹底的に刃向うから余計に父親とぶつかってしまうのだ。
「先輩は優しいもん！　どうして会っちゃいけないの？　行かなきゃ　全然　会えないんだよっ」
「いや、しかし。彼は一人暮らしだろう？　若い娘が……」
「そんなの関係ないっ。早くないよっフツーだもん。わたしたち、悪いことなんて　何も　してない！！」
うるっと目を涙目にして父親を睨むから、元来娘に弱い彼は項垂れた。
「わたし、着替えてくる」
ぷい、と少しだけ罪悪感を帯びた顔をして、唯子は真の横を通り

過ぎてリビングから出て行った。
階段を早足に駆け上がる足音がする。
彼女が横切った時、ふわり、と漂った　家のではない　石鹸の匂いに（姉さん、どこで風呂入ったのさ？）と真はツッコんで、心中複雑な気持ちになったのだった。

階段を上がって姉の部屋の前を通ると、話し声が聞こえた。
きっと「彼」と電話しているのだと真は思った。詳しい内容は聞き取れないし、真に盗み聞きする趣味はないけれど……口調から察するに先ほどの父親との会話に愚痴をこぼしているようだ。
姉よりもあの「先輩」の方がしっかりしているから、上手く宥めてくれるに違いない。
唯子の操縦は誰よりも巧みな人だから、とそれほど顔を合わせているワケではないけれど真はその姉の彼氏である「三崎純也〔みさき　じゅんや〕」という男を信用していた。
何より、男性嫌いの気があった　あの　姉が好きになった相手なのだから……逃せば次はいないかもしれない、とも思う。
姉が恋をするとは、真にとっては晴天の霹靂ともいうべき出来事だった。
人に好かれても、自分から好きになることはない姉だった。特に異性に関してはかなりの警戒心があるらしく（これは父親の教育も影響している）好意さえ煩わしいと思っていた節がある。もちろん、姉の周囲にそういう執拗なタイプの好意を向ける輩が多かったのも一因ではあるけれど。
自分の部屋のベッドにボスンと寝転がって、天井を眺める。
（　いつか、あの志野にもそういう相手ができるだろうか？　）

想像がつかないけれど、未来永劫このままというのは姉の前例から見てもないような気がした。
少し前。
中学二年に上がった頃だったろうか、愛美が今日みたいに女の子に絡まれたことがあった。
「付き合っている」ワケでもないのに、真といるのが気に入らないというのだ。
部活の帰り道、いつものように一緒に帰って……クシャクシャの彼女の髪や体操着姿を思い出して……隣を歩く何事もなかったような（きっとコイツにとっては「そう」なんだろう！）愛美に提案してみたことがあった。
「俺たちが、本当に付き合ったらいいんじゃないか？」
と。
「真ちゃん……」
目をまんまるにして驚くと、彼女は首を振った。
明るく「ダメだよ」と笑う。
「どうして？　こんなふうに因縁つけられることも減るんじゃないか？　俺も助けやすいし」
愛美と付き合っている、と言えれば、周囲にけん制もしやすい。
いろいろと都合がいいはずだった。
「ダメだよぅ、真ちゃん……そんなことしたら、真ちゃんの邪魔になっちゃうもん」
「はあ？」
「考えてみてよ、わたしと真ちゃんが付き合ってることになったら真ちゃん「彼女持ち」になっちゃうんだよ？　そしたら、真ちゃんと仲良くなりたい！　って女の子がいても諦められちゃうかもしれない。そんなのイヤだよぅ」
「……だから？　俺はべつに気にしないけど」
そんなに女の子からモテている自覚はないが、愛美が絡まれてい

るのだから　誰か　には好かれているのだろう、と思う。
が、だから何があるわけでもない。告白をされれば考えるだけだ。
「もぅ、わたしが気になるの！」
と、何故か彼女の方がムキになった。
「わたし、真ちゃんの幸せの邪魔だけはしたくないんだよ。そりゃあ、わたしがそばにいないのが　一番　いいのは知ってるけど」
離れたくないんだもん、と頬を膨らませて、俯く。
「真ちゃんが心配してくれるのはすっごく嬉しいけど、今のままがいいの！」
ポン、と小さな愛美の頭に手を置いて、ぐりぐりと撫でる。
「志野……」
撫でる真の腕を取り、愛美が顔を上げた。
「あのね、真ちゃん。それでも、本当に、真ちゃんがわたしを好きってことなら付き合ってあげてもいいよ？」
幸せそうに、エヘヘと笑う。
一切の思考が、真っ白になった。
「はああ？」
真の反応にクスクス声を立てて、首を傾げた。
「やだなー、冗談だよぅ！　真ちゃん、好きな子いないの？」
「いねぇよ、バカ！」
ペシン、と彼女の頭をはたいて、照れ隠しに「まあ、志野ってことはないなー」と意地悪に言ってみる。
「ひどぉーい」
プンプンと唇を尖らせて、愛美は真を睨んだけれどその目はごく自然に笑っていた。

この子が幸せになればいい、と願う。

誰よりも幸せに。

自分の代わりに守ってくれる相手が彼女の前に現れるまで……その時まで。

俺は、愛美のそばにいようと決めた。

「とりあえず、勉強するか！　高校落ちたらシャレになんねぇし」

真はベッドから体を起こすと、机に向かった。頭のいい愛美がランクを落として受ける高校は、それでも真にとっては少し上の進学校だ。

姉のいる学校でも、ある。

頑張らねば、落ちたらいろいろな意味で落ちこみそうだ、と問題集を開いて気合を入れた。

冬の夜ーＳ　光（後書き）

春日真の姉である春日唯子は、本サイトの中編（完結済）の「陽だまりＬｏｖｅｒ」の主人公です。もともと春日真はその話の脇役でした。という理由で、少し姉に関する描写が長くなりました。

二月一S→I　平穏（前書き）

いきなりですが、前半と後半で視点が切り替わります。
これより以降、視点の順番は変則的になりますのでご了承ください。

二月―S→I　平穏

志野原愛美〔しのはら　いつみ〕が台所にいると、春日真〔かすが　しん〕が奇妙な生き物を見るように彼女を見た。

勝手知ったる我が家、とでも言うように愛美がボウルに熱湯を注いで、そこに小鍋を浸すと切り刻んだ茶色い物体を放りこむ。台所の空気は一様に甘い。

なんで、志野がここに？

という、疑問は愚問だ。ここは正真正銘真の家の台所ではあるが、彼女がいる、という状況は案外恒例化している。

朝の早い時間、というわけでもないが……日曜の午前中に家族でない人間が台所でガサゴソしているのは、傍から見れば異様だろうな、と寝起きの頭で彼は冷静な感想を持った。けれど、それは彼女に対する図々しいという類の嫌味ではなく、どちらかというと安堵に近い。

真の目の届くところに愛美がいる、という事実が彼をホッとさせるのだ。

ただ。

「それ、チョコレート……だよな？」

と、一応訊いてみる。

「うん！」

いい返事を返して、愛美は一心不乱に小鍋の中のチョコレートをヘラでかき混ぜている。

心底、楽しいという表情だ。まあ、それはいいことだけど……。

「真ちゃんにあげるの。もうすぐ、バレンタインでしょ？」

「あー、そう」

まー、そうだと思ったけどね……。

どう反応すればいいのか、毎度真が困っていることに彼女は気づかない。
（俺にくれるものを、本人の目の前で作っていいわけ？　おまえ的にさ）
普通、こういうものは隠れて用意して、当日に渡すのがセオリーだと思うのだが……愛美はあまり気にしない性質〔たち〕らしい。
毎年毎年、真の家に来て作っては、出来のいい一部を綺麗に包装して、残りを春日家に進呈して帰っていく。
当然のことながら、真はいつもその進呈されたものとほぼ違わぬものをバレンタインの当日に受け取るわけだ。
いや、べつに愛美が気にしないなら真はそれでいいと思っている。目の前で作っているのを見るたびに、無性にツッコみたくはなるが。

愛美は台所を通り過ぎて、リビングに入る寝起きの真を不思議そうに眺めた。
（いま、真ちゃん……なんか　すっごく　物言いたそうな顔してなかった？）
毎年、相も変わらずチョコレートだけ、というのがダメなのだろうか。それとも、そろそろチョコレートではなくて別のものが欲しいとか……例えば、チョコレートケーキとか？
「ううっ、ムリです。材料が揃えられません……」
親から小遣いらしい小遣いを貰っていない愛美は、万年金欠少女だ。
ヨヨヨ、と肩を落として嘆く愛美を、リビングのソファに座った彼が変なものでも見るように眉をひそめる。
「志野？」
「ごめんね、真ちゃん……今年はコレで我慢して欲しいな」
「はあ？　何を？」

「ううん」
首を振って決意する。来年は高校生になっている、合法的にバイトができるじゃないか！　と心の中で拳を握った。
材料を揃えて、来年は喜んでもらえるように頑張るよ？
「こっちのハナシだよ？　気にしないで」
「ふーん」
訝しそうに愛美を眺め、真は追及しなかった。彼女の思考が浮世離れしているのは、環境のせいもあるけれど生来の性格もある。つまりはなかなか治らないし、自覚も薄い。
どことなく会話が噛みあっていないと彼は気づいているのに、彼女がまったく気づいていないのと相まって二人の間には成立しない会話の方が多い。
日常、と言ってもいい。
「あ！　真ちゃん。今日、久しぶりにお姉さんに会ったよ？　相変わらず天使みたいだねっフワフワしてて可愛かったぁ」
「んー」
それでも、会話を続けられるのは真が無視をしないからだ――と、愛美は思っている。
大抵、話しているのは　彼女　で聞いているのが　彼　だからだ。
（真ちゃんてば、ホントに優しいよね……見た目も素敵だし、見惚れちゃうなぁ）
ソファに座る背中にうっとりしながら愛美は続けた。
「真ちゃんはさ、見たことあるんだよね？　お姉さんの付き合ってる人」
「あー、まあね」
「どんな人？　今日もデートなんだ♪　とか嬉しそうに言ってたよ？」
見るからにウキウキした足取りで「いってきまーす！」と外に出て行った春日唯子〔かすが　ゆいこ〕は、同性の愛美から見ても華やかで輝いて見えた。

グッと女性らしくなった、と思う。
もともと綺麗で可愛い人ではあったけれど、少し前までは少女という感じが抜けてなくて……どちらかというと、男嫌い？　の気があったように思う。
「んー？　いい人だよ。姉ちゃんのこと、よく分かってるし……顔もいいし、見た目は姉ちゃんと張るくらい天使っぽいかな。しかも上級の？」

「……なんか、神々しそうだね」

想像して、愛美は想像しきれなかった。上級の天使、てどんなのなの？
頭の上に輪っかがある、とか。手に鞭を持ってるとか？
ちょっと、怖い。
「いや、おまえの想像とは　ちがう　から。ゼッタイ。それより、手、動かせよ」
ハッとして、愛美はヘラを動かす。
今回は、生クリームを入れて生チョコもどきだ。ココアパウダーは本物のココアの粉を使う。
予算の関係上、自分の家にあるもので代用しただけだけど。
タッパーにクッキングペーパーを敷いて、流しこみ冷蔵庫で冷やし固める。
パタン、と冷蔵庫の扉を静かに閉めて、リビングの方へ向き直る。
「ねぇねぇ、真ちゃん。わたしもその人に会いたいなぁ」
愛美は、春日家の人間がもれなく好きだ。流石、最愛の　彼　の家族だと思う。
赤の他人で押しかけ女房みたいな自分を受け入れ、家族みたいに優しくしてくれる。愛美の家庭環境が複雑だからと察して、快く台所を貸してくれたのも彼の家族が初めてだった。
その春日家の長女である唯子の好きになった男性〔ひと〕という

意味ではもちろんのこと、美少女で有名な彼女と同じくらいの天使的な外見（しかも、上級！）というのも気になるし、なにより真が「いい人」と評したことが愛美には重要だった。

「だって、唯子さんの　彼　ってことは後々は真ちゃんの　義理のお兄さん　になるかもしれないんだよ？」

ご挨拶すべきでしょう！

彼の身内とはできるだけ、仲良くしときたいもんねっ。

愛美のキラキラとした表情に変な顔をした真は、「姉さんに訊いとく」とだけ言って、一応、頷いてくれた。

二月―M→K　水面

そういえば、と栗石美晴〔くりいし　みはる〕は目を瞠った。

目の前に転がった可愛く包装された箱の数々に、机の向こうに並ぶ女の子の集団の気配をヒシヒシと感じた。

もう、そんな時期なのか……と近づく受験に焦りにも似た感覚を覚え、彼女たちみたいな余裕が欲しいと問題集に苦戦を強いられるわが身を嘆く。

顔を上げ、美晴は自分がいかに余裕がないかという表情を隠さなかった。

「なんだよ、邪魔すんなよ！」

勉強中なんだけど？　と睨む。

「仕方ないでしょ？　栗石くんが妹からしか受け取らないって言うんだから。渡してよ！」

美晴の机まで来た時点で、彼女たちの肝は据わっている。口の悪い美晴の暴言など最初から見越しての行動だから下手には出ないで最初から喧嘩腰だ。

派手な見た目とその言動から、自分によほど自信があるのだろう。要に受け取ってもらえなかった時点でかなり機嫌を損ねたらしく、美晴のところに来たのは半分意地なのかもしれない。

「はぁあ？　なんで、あたし？　体よく断られたって気づけよっ」

「なっ、失礼ね！　いいじゃない、簡単でしょ！！」

渡してよね、と苛立った目で美晴に命じて、彼女たちはスカートを翻す。

残されたのはチョコレートと思しき色とりどりの箱。

「……どうすんだよ、コレ？」

自分の机にのったそれを眺め、美晴はうんざりとした。

毎年、チラホラと美晴に要への仲介を頼む輩はいる。けれど、今年みたいに大量に来たのは初めてだ。
やはり、卒業が近いせいだろうか？
最後のチャンスだと考えれば、必死になるのも頷ける……か？
彼女たちの高飛車な態度にゴミ箱に捨てたい気持ちはあるけれど、美晴だって鬼ではない。
仕方ない、渡してやるか。
「……チッ、なんであたしが」
要と他の女の子との橋渡しをしなくてはならないのか、と悪態をつく。しかし、それと同時に自分にはそんな資格がないとも気づいてしまった。

「今日、バレンタインデーかよ。気づかなかった……」

ひとつのことに必死になると他のことはおざなり、この頭の許容量の狭さはどうにかしたかった。

「　要　」

家に帰るなり、ドサッと色とりどりの箱の入った紙袋を美晴は兄の前に置いた。紙袋は美晴の現状を見るに見かねた親切なクラスメートがくれたものだ。それに、一応学校に「そういうモノ」を持ってくるのは違反なので目立ってはいけない。
妹を見た要は、知っているクセに「なに、コレ？」と問う。
「おまえが言ったんだろ！　あたしからなら受け取るって、大変だったんだぞっ」
と、恨み節を吐けば、彼はおかしそうに首を傾げた。
「あー、アレ。あの子たち、そう解釈したんだ？」

「そーだよ！　あたしの名前を出すの、めんどくせぇからヤメロ！！」
「うーん、そうは言ってもねぇ……俺としては一番わかりやすく伝えてるつもりなんだけど」
「はぁあ？」
よくわからないと睨めば、要は微笑んだ。
「で。美晴からはないの？」
グッと言葉を詰まらせて、美晴は「ねぇよ」と低く唸る。
「俺の誕生日なのに？」
「ねぇっ！」
くわっと吠えると美晴は顔を背けた。要の誕生日がバレンタインデーだという事実は、知られていない。美晴との血の繋がりを疑われる要因になるから、あえて隠しているのだ。
「まぁ、いいけどね」

美晴が要の誕生日を忘れているのは、許容の範囲内だ。
「美晴が合格してくれるのが　一番　だし」
言えば、内心後悔している彼女が頑張るのは目に見えている。
「っ、仕方ねぇなぁ……見とけよ、要！」
上目遣いで睨む美晴に、要が微笑んだのは可愛くて仕方がないせいだ。天邪鬼な妹は、素直な性格ではないけれど反応は素直すぎる。
頭を撫でる要に美晴は嫌そうにするものの、受け入れた。負い目を感じているせいだろうけれど、と意地悪く要は目を細める。
「見てるよ」
気づかなかった？　と心の中で呟いてみる。
（俺は、ずっと美晴を見てるよ）
「あ？」

ナンのハナシ？　とばかりに彼女は見上げ、その無防備さに衝動を抑える。今は、まだ――ね。
「だから、頑張ってね」
にっこり微笑んで見せれば、美晴は「げぇぇ」と呻いて……真っ赤になって逃げていった。

夜。

リビングでの勉強会で要は美晴の前にチョコレートを差し出した。
彼女が運んできた箱の一つ。
「はい、あげる」
「いらねぇ！　超いらねぇっ」
自分で食え、と睨んできたから、要が買ってきた別の一口チョコを出して包装のセロファンを解いた。
彼女の頑なな口元に持っていって、微笑む。
「はい、あーん」
「ばっ、バカか？　誰がするかってーの！」
「美晴、糖分は疲れた脳にいいんだよ？　ホラ、食べて」
くすくす声を立てて「バレンタインデーでしょ」と優しく強いる要に、彼女は顔を真っ赤にして「意味わかんねぇ」と……口を開けた。
ぱくり。
「美味しい？」と訊けば、睨みつけるように赤い顔で要を見る。
「甘い」
「そう？」
「ほ、ホントに頭にいいんだろうな！　ウソ、だったら殺すっ」
「本当だから、勉強しようね？　美晴」
「……はい」
こくり、と頷いて美晴は黙々と問題を解きはじめた。要も向かいで問題集を開いて、脳裏に先ほどの彼女を思い出して満足する。

口を開いて、チョコレートを含むなんて……美晴のクセに、ちょっと艶めかしかった。

卒業Ⅰ　幸福論

あ　けーてぞ　け　さーぁは　わ　かーれゆぅくー♪

中学の卒業式の翌日が公立高校の合格発表の日だった。

「真ちゃん！　あった、あったよっ」

ぴょんぴょんと飛び跳ねて、志野原愛美〔しのはら　いつみ〕は我がコトのように喜んだ。その腕に引っ張られる格好の幼馴染の恩人様は迷惑そうな表情で呆れたとばかりに彼女を見下ろす。

「おまえね……そんな喜ぶってコトは、なにか？　俺が落ちるとでも？」

と、ものすごく不機嫌そうに言った。

ギクリ、としたのは冗談だよ？

「ち、ちがうよ！　だって、真ちゃんと同じ高校に行けるんだって思ったから嬉しくて」

そう、つい気持ちが高ぶってしまった。

「うれしい……」

涙が零れそうになるのを必死にこらえて、パチパチと瞬きをしてもう一度合格発表の掲示板を眺めた。

確かに、彼の「５９６」という受験番号がある。

「感動してるとこ申し訳ないけど、志野？」

「なぁに？」

「自分の番号は見たワケ？　俺、知らないから確認のしようがないんだけどさ」

「　あっ！　」

あ、ってなんだよ？　と笑って、春日真〔かすが　しん〕は愛美の受験票を覗きこむと顔を上げてすぐに声を上げた。

「あー、アレだ。５４９」

「……あ、あった？　わたしのあった？」
愛美は見るのが怖かった。
番号がなかったら、奈落の底に突き落とされたも同然だ。今の今まで、自分が落ちるという想像をしなかったから余計に不安になる。
そんな彼女を見て、彼は「馬鹿？」と小突く。
「あるよ。俺が受かるんだから、志野は余裕だろーが！」
嫌味か？　と睨む真に泣きそうな顔で愛美は訴えた。
「……わ、わかんないよぅ！　そんなの。わたし、運悪いし」
「ったく。面倒なヤツ……ホラ、見ろ。５４９、あるだろ！」
グイ、と下を向く愛美の顔を真の手が持ち上げて、促した。

「ある……」

「誰が運が悪いって？」
「わたし？」
「んなワケあるか！」
うん、だよね？　と愛美は、愛美の腕を振り払い先に歩いていく彼の背中を見つめた。
（きっと、わたしの運は真ちゃんに出会うことで使い切ってるだけ、だもん……）
そう考えると、強運なのかもしれない。
「志野？」
後方でボゥとしたように佇む愛美に気づいた彼が振り返り、彼女の名を呼ぶ。
それだけで、十分だって思うから。
「真ちゃん！」
彼の待つ固くツボミを結んだ桜の木の下に駆けていって、抱きつく。

「おいっ！」
嫌そうな声が耳元に流れてきても、愛美ははなさなかった。
パッと顔を上げて、笑う。
「高校でもよろしくね、真ちゃん」
その距離が息がかかるほど近いことも、周囲に未来のクラスメートとなるかもしれないギャラリーがたくさんいることも彼女には問題ではなかった。
「はいはい、よろしく」
諦めた真が応えてくれること、「また、志野のお守かよ？」と皮肉っぽく呟く仕草まで目に焼きつける。

忘れないよ。

わたしは……一生、今の貴方を忘れない。

キスしていい？

訊く前に、唇を寄せた。

卒業ーS　境界

頬に、少し冷たくて柔らかな感触を感じた。

「――なっ！　おまっ……なにして」

志野原愛美〔しのはら　いつみ〕の肩を掴んで引きはがし、春日真〔かすが　しん〕は自分の頬を手の甲で拭う。けれど、打刻された熱はなかなか引かない。

どころか、上がった。

周囲のギャラリーには同じ学校のクラスメートも含まれていたせいで、口笛や囃し立てる声がやかましいほど耳に入った。

「ついにまとまるのかー？　おまえら」

「つーか、どこまでイッてるんだー？　じつは熟年じゃねーの！」

「言えてるーっ」

などと勝手なことを騒ぎ立てるから、真は彼らを睨んで黙らせた。

「うるせーよ！　志野、来いっ」

「え？　あれ……わたし、なんかした？」

予想通りの彼女の反応に真は頭が痛くなり、高校生活の先が思いやられた。

「やったよ、やった。どでかいのを一発な！　入学前から俺たち公認かもよ？」

「公認？」

「恋人同士、ってこと。言っとくけど俺のせいじゃないぞ」

男の頬にキスをする方が悪い。無自覚、だとは言え、収拾のしようがなかった。

言い聞かせるように説明すると、愛美は真っ青になった。

「う、嘘！　真ちゃん、どうしょう……わたしっ、みんなに誤解だって言ってくるよ！！」

「無駄だよ、無駄。どんだけいたと思ってんの？」
「じゃあ、別れたってコトに……」
「付き合ってもねぇのに、どうやって別れるんだよ。余計ややこしいだろ」
「うー、だってぇ……真ちゃんに迷惑かけちゃ、そんなのヤダぁ！」
うるっとなって、ふぇぇと愛美は泣き出した。
「ごめんね、真ちゃん。ごめんねぇ……」
「いいから。志野に迷惑かけられるのイヤなら、とっくに離れてるし」
「ひどいよぉ！　はなれないもんっ」
泣く愛美の頭を撫でて、真は彼女に謝られるほどには迷惑だと感じていなかった。半ば、愛美の予想外の行動から生まれた状況ではあるけれど、彼女がしなければ真がそういうふうに仕向けたかもしれない。
（まー、大胆だよな？　志野は）
仕向けるにしても、まさかココまでの行動が出るとは思ってなかった。
「誤解させとけばいいよ。関係ないヤツにはさ」
「う、うん。でも……じゃあ、真ちゃんは言ってね？」
「んー、何を？」
彼女は能天気ないつもの言動からは想像もつかない真剣な顔で、
「好きな子ができたら、わたしに言ってね」と訴えた。
「わたし、ちゃんと誤解、解くから！」
「……ああ」
あまりの真剣さに気圧され、真は頷いて――複雑な表情になる。
（こいつ、ホントに俺のこと好きなのか？）
そういう好き、ではないのかもしれないと思ったことがある。
付き合う、という選択肢が彼女の中にないのだから　きっと　そ

ういうことなんだ。
べつにそれでも　問題　はないけれど。
じゃあ。
この、胸のモヤモヤは……なんだ？
（独占欲？　冗談じゃないぞ。俺はそんなに心の狭い人間じゃないってーの！）
真面目な顔で仰ぐ愛美の額に指をあて、ピンッと弾いた。
「イダッ！」
額を押さえた彼女は先ほどとは違う涙目で彼を見て、恨みがましい呻き声を上げた。
「痛いよぉ、ひどいよぉ、真ちゃんなんで怒ってるの？」
やっぱり誤解されるのイヤなんじゃないの？　と首を傾げて訊くから、手を振った。
「怒ってねぇよ」
「じゃあ、なんでデコピン？」
よほど痛かったのか、愛美は「痛い」を連呼する。
「……さぁ？　なんで、だろうなぁ」
真は自らも問うように冬の雪雲を仰いで、答えのない腹立たしさに白い息を吐いた。

卒業ーS　境界（後書き）

視点の順序をどうしようか迷いましたが、書いた順序に沿ってみました。
書いた勢いが伝わればいいな、と思っています。

卒業ーM　罠か罠か（前書き）

コチラの場面ではＲ１５程度の性的表現（やや無理矢理）があります。ご注意ください。

卒業ーM　罠か罠か

グシャリ、と栗石美晴〔くりいし　みはる〕は手の中の受験票を握りつぶした。

「あった……」

呆然と番号の羅列が続くそれを眺め、立ち尽くす。

じわじわとせりあがる達成感と満足感に胸が高鳴る。

唇からはくつくつとした笑いが洩れて、周囲にいる女の子たちがすこしずつ　離れた。

「ざまぁみろ、要。あたしは勝った！　この勝負……高校受験、恐るるに足らずっ」

桂林女子商業高校、ここいらの地域では省略して「桂女」と呼ばれる高校の校舎の前で美晴は立ち、フハハと見事なまでに目立った高笑いをしてみせた。

そうして、喜び勇んで家に帰り、兄である栗石要〔くりいし　かなめ〕に突きつけたのがつい先刻〔さっき〕のことだった……ハズだ。

「良かったね」

と、彼は言った。

美晴より一足早く湊西〔みなとにし〕高校に進路が決まった彼は余裕の表情で、少し悔しい。けれど、それを上回る興奮で彼女はまるで注意をしていなかった。

いつもなら、彼の部屋には　絶対に　（べつに意識してるワケじ

ゃあねぇよ！）入らないのにたまたま彼が自室〔そこ〕にいて、しかもベッドに寝転んでいた（ん？　なんでだ？　ああ、本読んでたから？）から上がりこんで合格通知を目の前に差し出した。
「見ろ！　あたしだってやれば合格すんだよ。ざまぁみろ！！」
合格したからと言って頭が悪いのが劇的に変わるわけではないが、合格圏外だった高校に受かったという自信から美晴は要の前で胸を張った。
どうだ！　と言わんばかりの美晴に要は微笑んで「そうだね」と肯定してくれる。
「美晴はやれば出来る子だからね」
「かなめ……」
柄にもなく、グッときた。
要は美晴の受験勉強の際、冷徹な家庭教師だった。冷たく突き放して、一切の甘えを許さない。超スパルタのサディストだと何度罵ったかしれない。
けれど、今は。
「俺は、知ってたよ。美晴は出来る子だって」
「要！」
うるっときて、慌てて抱きつく。
こうすれば泣き顔を見られる　屈辱　からは逃れられるからだった。
「美晴、泣いてる？」
「なっ、泣いてねぇ！」
ギュウゥゥと腕に力をこめて、否定するとグルリと視界が回転してドサリと背中にやわらかな布団の感触がした。要にベッドへ押し倒されたのだ、と理解するのに美晴はかなりの時間を要して――そうして、その間にも事態はあらぬ方向に動いていた。
「　ひっ　」
と、美晴は体が硬直した。
首筋に生温かい息がかかるのは自分が抱きついたせいだと分かっ

ているが、じゃあ、足の間にある感触はなんだ？
合格発表を見に行ったあと、ということもあり彼女の服装は中学の制服の冬服だった。
だから、下はスカートで家にいる時はジーパンスタイルが多い美晴には不可解な感覚が直に触れる。
それが、人の指……要の指だと知るのに時間がかかる。
いや。
本当はすぐにわかった。けれど、そうだと頭が認めるまでに彼女の脳は恐慌状態に陥ったため的確に処理されなかった、と言うべきか。

（な、なんだこれ、なんだこれなんだこれっ！）

「ぎっ」
その手がスカートの中の彼女の下着に達して、指先がツンと奥を押し上げる。
ゾクン、と身が震えた。
（な、な、な）
「か、なめ。なに、やってんだ？」
その間も指は足の付け根をなぞっている。
変な感じだと、モゾモゾと動いて美晴の声は徐々に小さくなった。
「解からないの？　本当に？　男女がすることだよ、美晴の　ココに俺のを入れたい」
トントンとノックするみたいに叩く。
「　！　」
ほ、保健体育のハナシ？！
（げぇぇぇ！　ウソだ、うそだ、嘘だぁっ。冗談に決まってるっ）
もがく美晴を要は難なく押さえ、耳元に囁いた。
「俺の家庭教師代は高いよ？　美晴」
「ば、バカ！　やめろっ、その気になったらどうすんだっ！！」

「ぷっ、面白いこと言うね？　美晴、その気になっちゃうの？」
望むトコだよ、と彼女の赤く染まった耳たぶを要の唇が甘噛みする。
「ち、ちがっう！　そういう意味じゃねぇっ……ぅあん」
ぐい、と下着を押し上げる指先が割れ目にねじ込まれて、美晴は自分の出した声に絶句した。
（ぎぃやぁぁぁぁ！　なんだいまのっ、なんだいまのっ気色わりぃ）
「　可愛い　」
（ひぃぃぃ！）
要の腕に抱かれ、美晴は正常な判断ができないまま震えるその身を小さく丸めて、女の子みたいに怯えてしまった。

卒業ーM　罠か罠か（後書き）

次回、栗石兄妹、兄視点でも引き続きＲ１５（やや強引に磨きがかかります）表現が含まれます。大丈夫な方だけ、引き続きお付き合いください。

卒業ーK　報酬と駆引き（前書き）

引き続きR15程度の表現が含まれます。無理矢理度が前場面の妹視点よりもエスカレートしていますので、苦手な方はご注意ください。

卒業ーK　報酬と駆引き

（馬鹿な子だよね？）と栗石要〔くりいし　かなめ〕は目の前で胸を張っている妹を見て、つくづくと思った。

「　要！　」

無防備に胸に飛びこんでくる美晴に、口の端を上げてギュッと抱きしめる。

（美晴の、そういう馬鹿なとこ、好きだな。馬鹿すぎて……なんだか俺の理性が馬鹿みたいに思えるから、ね）

制服の彼女をベッドに押し倒して、スルリと彼女の足の間に体を滑りこませて閉じられないようにしっかりと押さえつけた。

一瞬、怯んだ彼女の体はそれでも微かな抵抗しかしなかった。

危機感がまるでないみたいに狼狽えて、そのまま足の素肌を滑る要の指に気づくと困惑したように訊いてくる。

「か、なめ。なに、やってんだ？」

「解からないの？　本当に？　男女がすることだよ、美晴の　ココに俺のを入れたい」

正直に本音を言えば、彼女は大きく身じろいでジタバタと手足を暴れさせる。

上に覆いかぶさる彼の胸や太腿のあたりを押したり、蹴ったりするけれどすでに後の祭りだ。

いまや、二人の力と体勢の差は歴然としている。押さえこむのも容易いと要は美晴の耳元に唇を寄せて囁いた。

「　俺の家庭教師代は高いよ？　美晴　」

その挑発に返した美晴の言葉が面白くて、つい悪ノリだと自覚しながら要は彼女に手を出してしまった。

「ひっ！　胸を、ムネをっ……もむなぁっ！　ゃん。スケベ、エロっ」

なじる言葉の間に混じる、可愛い声に男の下半身が刺激される。

制服の上から美晴の胸を手のひらに包んで、形を確かめるように握ってみる。

「小さい？」

「！　なっ、なっ、わ、悪いか！！　どうせAだよっ」

美晴の胸は見た目を裏切らない　ささやかな　存在感だった。けれど、揉めば普通にやわらかいし（一応）ちゃんとブラもしている。

「知ってる」

家事分担制の栗石家では、当然のことながら洗濯も分担制だ。はからずも彼女のカップ数は目に入る環境にある。

「じゃあ、なんで触るんだよっ。か、からかってんのか！　んぁんっ」

恥ずかしさに真っ赤になって抗議する美晴に、要は体を少し持ち上げた。上から彼女の姿を見て、フッと笑う。

女の子だ。

どんなに天邪鬼で、色気がなくて、口が悪くても――美晴の体は「可愛く」反応してくれる。

そのギャップが要にはたまらない。

ブラ越しにもわかる妹の可愛い頂を、指の先で弄ぶみたいに挟んで転がす。

「だっ……ヤメ、かなめっ」

焦る仕草も、自分を　誘っている　としか思えなかった。

（可愛い……もっと、見たいな）

冬のセーラー服とタンクトップの上はお腹のお臍が覗く程度に乱

れ、下に至っては暴れたせいか足の付け根の白い下着が見えるほど捲れ上がっている。
どちらかというと少年みたいな体つき、なのにわずかに主張する胸の小さな膨らみや白い太腿の裏側が「女」を感じさせて、呼吸とともに上下していれば十分にそそられる。
もちろん、それは好きになった弱みなのかもしれないけれど。

（美晴の体だから、こんなに……悪戯したくなるのかな？）

「ど、どこ見てんだよ！　見るなっ」
キッと彼女は精一杯の虚勢を張って、威嚇する。
「美晴、下のコレ、脱がしていい？　邪魔だよ」
要が指し示したものに彼女は青くなり、「げぇぇ！」と呻いた。
まったく色気がない。
（ホント、美晴らしいなあ……）
と、微笑みながら要は彼女のショーツに手をかける。
ずらそうとする彼に、美晴はもうこれ以上はない羞恥の表情で体を必死に揺らした。
「っや！　ヤメロ！！　なんでこんな……恥ずかしいだろっ」
「じゃあ、上なら？」
「恥ずかしい、つってんだろ！　なんで、要に見せなきゃなんねぇんだよっすっげぇ貧相なんだから見るなっついでに触るなっ、バカァッ」
「あー、そっちなんだ？　イヤがる方向」
笑って要は手を引いた。

「俺、美晴が好きなんだけど」

「へ？　あ？」
「だから、いいよね？」

「は？　え……あ！　な、なにが？」
突然の告白に、美晴はしどろもどろになって要を見上げた。
その薄く開いた彼女の唇に唇を重ねて、啄むキスをする。
呆然となすがままの唇を吸って、要は艶然と笑いかけた。
「脱がせて。美晴の　ココ　に俺を、入れても」
ジーンズの膝で、彼女の入り口をグイッと押した。

「い、い、い、いいワケ……あるかぁぁぁぁあ！」

ドン、と。
ようやく頭が回転をはじめたらしい美晴は上に乗る要を力いっぱい両腕で突き飛ばして、ハァハァと乱れた息を吐き真っ赤に染まった顔を隠して脱兎のごとく逃げ出した。
部屋の扉の向こうに走り去る彼女の背中を見送って、壁にもたれた要は「家庭教師代はファースト・キス一つね」と満足そうに目を細め――届かないだろう取り引きの言葉を、口ずさんだ。

卒業ーK　報酬と駆引き（後書き）

寸止めです。R15中程度かな～と思っていますが……どうでしょうか。次回、最終場面の後日談で三話ほどあります。よろしければお付き合いください。

春間近ーI　予兆

朝のまだ早い時間帯。
町内にある通学路で志野原愛美〔しのはら　いつみ〕は栗石要〔くりいし　かなめ〕と遭遇した。
中学校の卒業式以来初めて顔を合わせるけれど、同じ町内のご近所さんなのだから高校がちがったからといって急に顔も見なくなるわけではない。たぶん、こんなふうに高校になっても顔を合わせるのだろうと思った。
「おはよう、志野原さん」
彼は朝の空気によく似合う澄んだ笑顔を見せて愛美に手を振った。
「おはようございます、栗石くん」
頭を深々と下げて彼女は応え、次に首を傾げた。
「どうかした？」
と、要が問えば愛美は微笑んだ。

「ここ。初めて美晴ちゃんと栗石くんに会った――ところだね？」

それは、ちょうど小学校の下校途中のことだった。
春日真〔かすが　しん〕が空手の試合で不在で、一人きりだったのが悪かった。
「や、やめてよぅ！　かえして」
ぴょんぴょんと跳ねて、数人の男の子に囲まれた愛美は一人の背の高い彼が奪ったソレに手を伸ばす。
それは、真の姉である春日唯子〔かすが　ゆいこ〕がお下がりでくれたピンク色のリボンだった。
手入れの行き届いた唯子の明るい色の髪を飾っていたソレはまる

で天使の加護を受けた幸せの象徴のようで、ヒラヒラと靡くたび自分には分不相応だと知っていたけれど欲しかったモノだ。
唯子が「あげる」と差し出してくれた時は、夢だと思った。
躊躇っていると、天使の微笑みで愛美のガリガリの手を握って指を開かせ、リボンをその中に入れてくれた。
『大事にしてね』
と、笑ってくれた陽だまりの少女が脳裏に過って、悲しくなる。
手放したら、ダメだ。
「かえして！！」
必死に手を伸ばすけれど、身長の差は大きくとても届かない。
意地悪な顔をした男の子は愛美を見下げるとさらに見せびらかすようにリボンを高く掲げた。
「おまえにゃこのリボンはもったいねぇぞぉ、志野原ぁ。全然似合ってねぇし」
周囲の男の子たちも同意を示すように囃し立てる。
「俺がもらってやるよ。なんてったって　あの　春日唯子ちゃん♪
のリボンだし……ぐわっ！」
ドォン、とその男子に　何か　がぶつかって横倒しになる。
それが人だと理解するまでに、その物体は男の子の腕に噛みつきその手にあるリボンを奪い返していた。
ぎゃああ！　という男の子の悲鳴と、フーッと肩を怒らせた小さな背中。
背丈は愛美と同じくらい、体格もよく似たもので違うのは髪型とところどころにある傷跡の数、それに日に焼けた肌の色。
「ホラ！　おまえのだろ」
振り返ったその子が生傷だらけの手を差し出して、愛美にリボンを返してくれる。
「あ、りがとうございます」
「フン、べつにいい。オレ、こういう弱い者いじめ？　みたいなの、すっげぇキライ！」

その子は（たぶん）女の子なのに（だって、スカートはいてる）男の子みたいに自分のことを「オレ」って言った。
言動も行動も男の子みたいだけど、体は小さくて力だってあるワケじゃなさそう。
なのに、周囲の男の子たちの不穏な空気にも平気な顔をして、喧嘩を売る。
「そんなヤツ人間じゃねぇよ、ただのバカ？　あーあ、オレに言われたらおしまいじゃね？」
「なんだとぉ！」
やっちまえ！　と言う男の子たちに彼女も臨戦態勢に入り、愛美はビクリと怯えた。けれど、間に入った彼女の兄がアッサリとその場の収拾をつけて（どうやったんだっけ？　忘れちゃった）、大事には至らなかった。
あの後、しばらく彼女を追い掛け回して嫌われたりもしたけれど、気づいたこともあった。

「え？　あー、ホントだ。よく……覚えてるね？　流石、志野原さん」
「だってぇ、美晴ちゃんとの運命の場所だもん！　忘れないよぉ、あーすっごくすっごく懐かしいなぁ」
夢見るようにうっとりと思い出を噛みしめると、「美晴ちゃん、元気にしてる？」と要に訊いた。
生活のサイクルが違うのか、要に出会うほど美晴とは遭遇しないのだ。家まで遊びに行ったら、思いっきり嫌がるよね？
「美晴？　まあ、元気だよ。逃げ出しちゃうくらいには、ね」
口角を上げて可笑しそうに告げる要に、愛美は不思議に瞳を瞬いた。
「？　栗石くん？」
「こっちのハナシ。それより、志野原さんは今から春日の家〔うち〕

？」
コクン、と頷いて愛美はにっこりと満面の笑みを浮かべた。
「うんっ。今日はね、真ちゃんのお姉さんの彼氏に会わせてもらう予定なんだぁ！　楽しみっ」
「へぇ」
手のひらを打ち合わせて嬉しそうに言うと、「いいでしょ？」と細い体の薄いつくりの胸を反らせてみせた。

気づいたこと、きっと「彼女」は「彼」を好きになる――だから。
美晴ちゃんの恋が上手くいけばいいなあ、と愛美は（さみしいけれど）願っている。

春間近ーM→K　接近（前書き）

コチラの場面には一部Ｒ１５程度の表現が含まれます。ご注意ください。

春間近ーM→K　接近

栗石美晴〔くりいし　みはる〕は一人、町内にある川べりの公園の土管の中で悶絶していた。
思い出せば、思い出す分だけ妙な熱が上がる。だから、思い出したくはないのに……勝手に脳内が再生を繰り返すから恥ずかしさでいっぱいになる。
そう、恥ずかしい。
ただ、恥ずかしい。
それだけ、なのが　大問題　だ。

きっと、あの時、体は欲情してた。
なんて。

（うっわあ！　あたしって、あたしって……気持ちよかった、とか考えてねぇ？　実際、イヤじゃなかったんだよな？　相手、要だし。って、うぎゃぁぁぁあ！！）

要を好きだと思ったのは……たぶん、あの時から。
『――オレ、こういう弱い者いじめ？　みたいなの、すっげぇキライ！』
いつもみたいに後先を考えずに突っ走って、勝てそうにない相手に喧嘩を売るのは自分でも無謀だと思う。それで怪我をしても仕方ないって諦めてた。
学習能力がないんだから、だって……しょうがないだろ？　見て見ぬフリなんて、出来ないんだから！

『　僕の妹に何かしたら、タダじゃおかないよ？　』

女の子みたいに扱われるのは　全然　慣れなかったし、好きじゃなかった。でも、本当は　ちょっと　嬉しかった。

自分の身は自分で守らないとダメだって知っていたから、強がって生きないと負けると歯を食いしばって踏ん張ってきた。

男の子みたいに。

初めてだったんだ。

コイツになら負けてもいい、って思ったのは。

女の子として守ってもらえるそんな　場所　があるって思えることが……嬉しかった。

たとえ、それが要の「妹」という枠組みの中のものだとしても――。

「ああ、ダメだ。絶対、嘘だ……からかわれてる、そうにちがいねぇ！」

「何が？」

「あたしなんて好きになるはずねぇんだ……口悪いし、色気はねぇし、体だってスゴクねぇし……ぎゃっ！」

一人、ブツブツと土管の中で口に出して列挙すれば、ハタと人の気配に気づいた。

覗きこむ顔に見覚えがあって、さらにそれが今一番顔を合わせにくい相手だと知って美晴は慌てた。

「か、かなめ？」

（なんで、ココに……）

逃走を考えた彼女の腰は土管の中で彼がいる側とは反対方向にずらされる。

にっこりと笑って、彼は逃げ腰の美晴の腕を取った。

「捕まえた。なんか難しいこと考えすぎだよ？　美晴なんだから本能で感じればいいのに」
「なんだ、それ！　あたしだって考える時は考えるんだよっ。悪かったなっ！！」
キッと睨んで、美晴はええい、離せ！　と彼に取られた腕を振った。
「悪くはないよ……でも」
しょうがないな、と要は言って強く美晴の腕を引き寄せる。
「わっ！」
その胸にぶつかって、美晴は固まった。
ゾワリとする感触、生温かい吐息がなぶる耳たぶに神経が集中したのが分かった。
「俺、美晴が好きだ」
「……」
そんなワケない、と言い聞かせる。
本気にしたら、間違いなく深みにハマる……自信がある。
（あたしは　絶対　信じないぞ！）
「美晴、聞いてる？」
「……」
応じれば負けると知っているから黙りこむと、相手もそれに気づいたようだった。
「ふーん、そう？　なんだっけ？　口が悪くて色気がなくて体もスゴクない……から、そういう頑なな態度なの？」
口に出そうになる叫びを何とか我慢して美晴は息を詰めた。
「わかった。じゃあ、証明してあげる」
（は？　なにを？）
彼女の腰を抱き寄せて、要が目を逸らせないほどの至近距離で真摯に告げた。
「口が悪くて、色気がなくて、体がスゴクなくても　全然　イケる

ってコトを、ね」

唇が重なって、美晴は少し身じろいだものの動けなかった。
土管の中で押し倒されて、割られた膝の間に彼の腰が滑りこむ。
低い姿勢でそばにくるのは、ため息みたいな要の吐息だ。
「せっかく怖がらせるかと思って　昨夜は　気を遣ったのにね」
「ぎゃぁぁぁあ！　膝を持つな、膝をっ」
大きく開かされたズボンの股越しに互いの下半身がグッと密着する。
擦りつけるように、彼の腰がゆっくりと動いた。
「ひっ！」
エロいっ！
昨日のより、さらに具体的にエロいって！！　この体勢っ。
「ホラ、判る？　俺が本気な証だよ」

硬くて熱い何か（って、要の……なんだろうけど！）が　確かに
美晴の付け根の敏感なところを服越しに何度か押した。グイグイと。
が。
（そ、そんな証明は　いま　いらねぇっ！）
耳まで真っ赤になった彼女は、恥ずかしい声が喉から出そうになるのを必死に押しとどめて、彼を睨みつけた。

土管から這いずるように出てくると、不機嫌な彼女は彼を怒ったように（いや、実際かなりのご立腹だ）睨んだ。
「要は……あ、あたしを好きって言うよりヤリたいだけ、なんじゃねぇの！」

栗石美晴〔くりいし　みはる〕は言い、栗石要〔くりいし　かなめ〕は否定した。
「そんなことないよ。大体　したい　だけなら　それこそ　美晴は選ばないし、面倒でしょ？」
グッと彼女は言葉に詰まり、頬を染める。
確かに要の言う通りだと、思ったのだろう。
「そんな女と　したい　のか？」
「そうだよ。まだ、疑う気？」
要がチロリと問うと、美晴は慌てて首を振り「証明」を　またされてはたまらないと彼から飛び離れた。
「わ、わかった」
コクコクと頷くけれど、本当に納得をしているのかは　かなり疑わしいと要は思う。
「じゃあ、美晴。早いうちに　最後　までしようか？　いつがいい？」
サラリとまだ午前中の日の高いうちにする話ではないな、と自覚しながら口にする。
冗談ではなく、結構本気なのだけど……案の定、美晴は真っ赤になって「知らねぇ！」と本気には受け取らなかった。
「美晴」
「あぁ？」
鬱陶しそうに要を見上げて、彼女は目を剥いた。

「――好きだよ」

ゆっくりと待つほどの　時間　は二人には必要ない。美晴に考える余裕を与えるよりは、本能に訴えかけるほうが手っ取り早いし……たぶん、一番正確な答えを出すだろう。
そして。

要の答えは、決まってる。
（美晴、気持ちよさそうにしてたし……）
と、先ほどの反応の良さに兄は確信して、頬を染める意地っ張りな妹に優しく微笑んでみせた。

春間近ーM→K　接近（後書き）

次回、最終話になります。最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

春間近ーI　布石

高校の職員室の前で、志野原愛美〔しのはら　いつみ〕は立ち止まった。

春休み。新入生の代表を務めることになった彼女はまだ入学式前ではあったけれど、何度かこの学校を訪れている。

そのたびに、この職員室の前（あるいは、校長室の隣？）に飾られた絵の前で足を止めた。止めずには、いられなかった。

この絵の作者に、つい先日会ったのが大きな理由の一つである。が、その前からどんな人なのだろうと気にはなっていた。

影と光。

深く、とらわれる闇と恋い焦がれる眩い光の対比が内にある自らの姿と、重なって見えた。

「――三崎純也〔みさき　じゅんや〕さん、姉ちゃんの彼氏。で、こっちが幼馴染の志野原愛美ね」

春日真〔かすが　しん〕が家の玄関先で紹介してくれた男の人は、ふわりと微笑んで「はじめまして」と愛美に話しかけてくれた。

やわらかな黒髪に優しい瞳。そこにいるだけで和むような柔和な美形だった。

「うわあ、うわあ！　はじめましてっ、真ちゃんにいつもくっついてます。今日はワガママ聞いてもらってすみませんでした」

深々と頭を下げて、謝る。
今日は、愛美が会いたいと言ったから唯子を迎えに来たところをわざわざ時間を空けてくれたのだ。
「真ちゃんの未来のお義兄さんに会えるなんて！　嬉しいですっ」
「げっ、バカ」
グッ、もごもご。
いきなり口を真に両手で塞がれて、愛美は驚く。
（な、なにか変なこと、言った？）
「純也さん、コイツの言うことあんまり気にしないでください。なぁんも、考えてないんですからっ」
「むごっ、むごー！！」
愛美が必死に塞がれた口で反論していると、目の前の上級の天使が（あー！　なんかそんな感じっ）声を立てて笑った。
「真くん、いいよ。放してあげて？　ふふ、可愛いね」
「純也さん！　甘やかすのはよくないっ」
「いやいや、僕も本気で考えてるし」
「え？」
呆然となった真に、純也は少し真剣になって口にする。
「君の、義理の兄になるにはどうしたらいいかな？　とかをね、うん」

それって……と顔を見合わせていたら、玄関の扉が開いて家から春日唯子〔かすが　ゆいこ〕が華やかに飛び出して来た。
「純也さん、おまたせ！」
フワッて羽があるみたいにステップを踏んで、ギュッと彼氏の腕に腕を絡める。
「なあに？」
漂う空気の違和感に首を傾げる　その　仕草まで可愛い、と愛美は感動した。

もちろん、唯子は昔から「天使みたいに可愛い」と評判の少女ではあったけれど……純也と揃うと、もっと安定した穏やかな空気を纏う。
見惚れるほどに、幸せそうな天使だった。以前の天使は少女の上辺と危うさの前に成り立っていたのだと、気づくほど。
純也は真と愛美の二人にだけ気づくようにシッと人差し指を立てると、穏やかに微笑む口元に添えた。
「なんでもないよ、行く？」
「うんっ」
じゃあね、と唯子は真と愛美に手を振って、促されるまま彼氏についていった。
「びっくりした」
と、真がポツリと言って愛美は彼を見上げた。
「イヤ、なの？」
「んー？　そうじゃないけど。フクザツ？」
口の端に笑みをのせて皮肉気に笑う真を、愛美はなんとなく平静では見れなかった。
「姉ちゃんのベタ惚れだと思ってたから、かな？　そんなすぐ、純也さんが　考える　と思わなかった」
「ふーん」
すぐ、じゃない。
と、愛美は心の中で繰り返した。
わたしは、ずっと思ってた。
あなたと一緒になりたい、って。

あなたの、一番になって……ほかの誰にも触らせたくないって。
馬鹿みたいに、わたしだけを、見て欲しいの。
本当は……本当はね？　あなたの家族だって「いらない」って。
思っちゃうの。

愛美の中にある、ドス黒い　この　欲望はたぶん消すことのできない自分の　本当の　気持ちだ。けれど、それを口に出してはいけない。先にある未来が　破滅　だと知っているから。
隠さなければ、ならない。
大切な存在を、失いたくないから。
どうすれば、失わずに……そばにいられるだろう？
それは、とても。
――とても、難しいのだと思う。

春間近ーⅠ　布石（後書き）

「不完全近隣系図」完結です。
高校生・大学生編や社会人編も考え中ですが、とりあえず「不完全」はここが最終場面となります。続編の連載開始時期は未定ですが、忘れられないうちに書きたいな！　と思っています。需要があるのかは謎ですが。

最後まで読んでいただいてありがとうございました。
また別の話でもお会いできるよう頑張りますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4990q/

不完全近隣系図

2011年4月26日21時25分発行